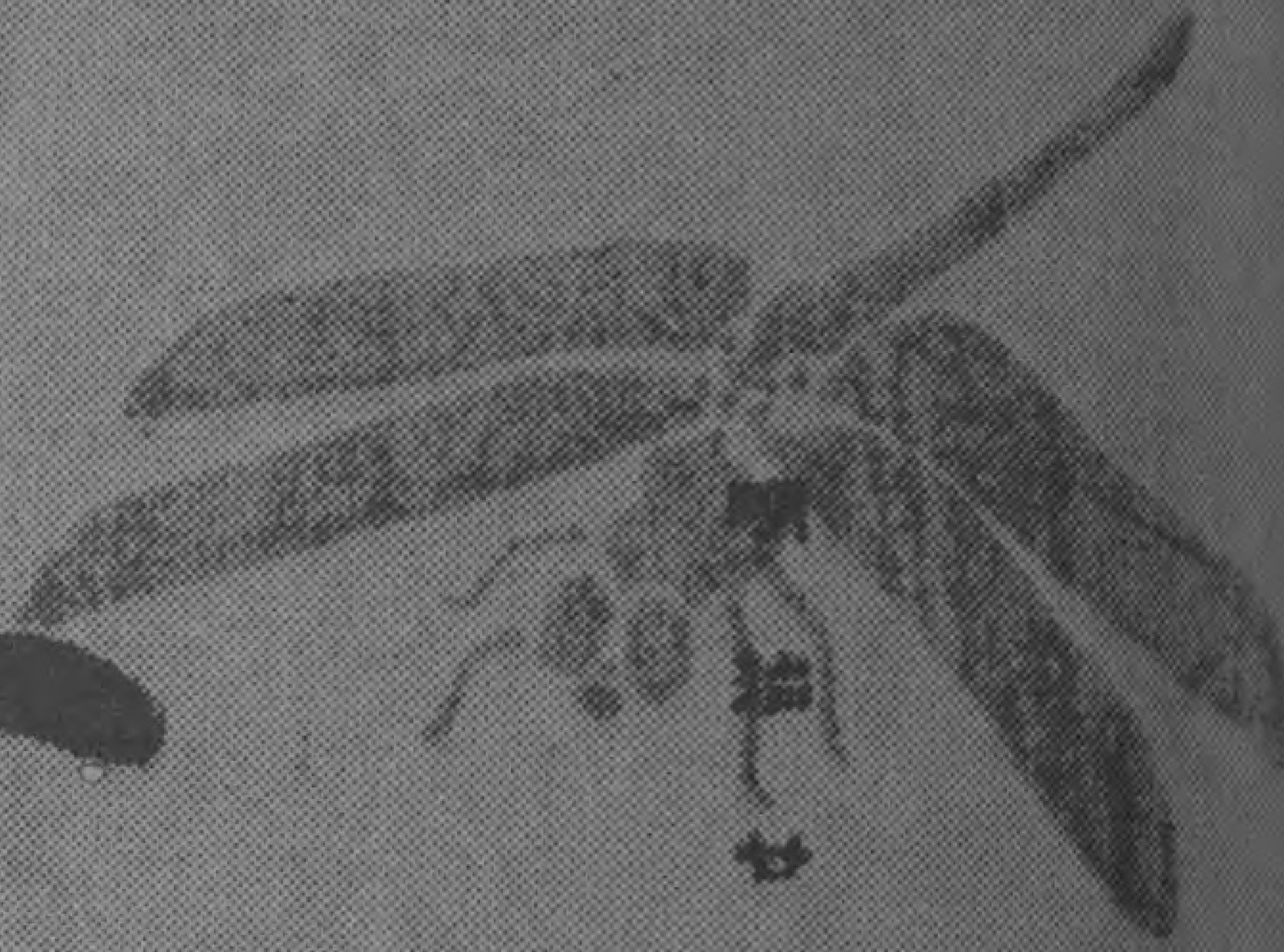
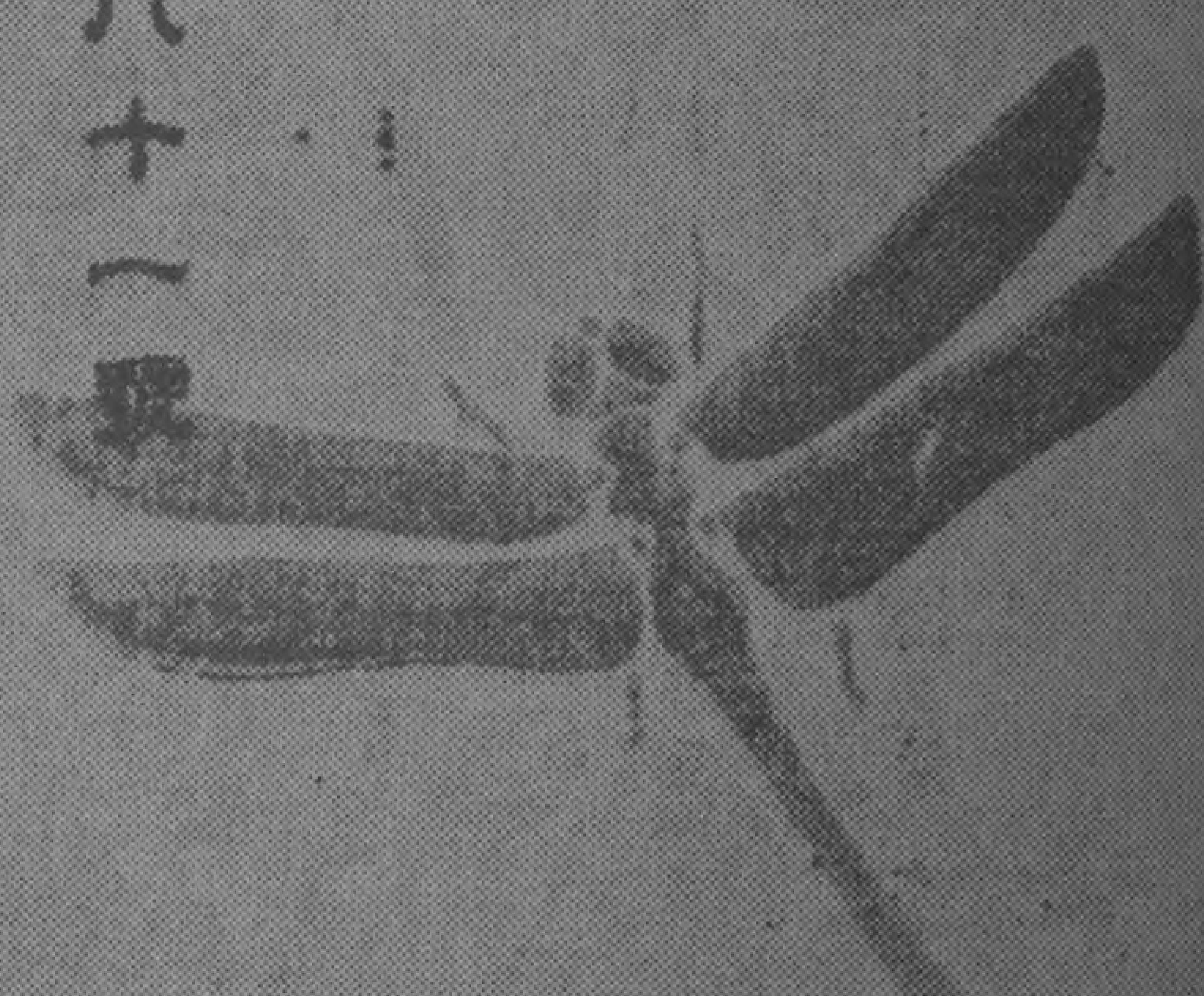
女鑑

明治廿八年二月二十八日發行





第八十一號



東京國光社

女鑑第八十一號目次

巴御前



女鑑 第八十一號

無情の人と爲ること勿れ

かたちこそみ山がくれの朽木なれ
こゝろは花になさばなりなん

こは、形は、深山がくれの老い朽ちたる木なれども、心は、花になさば、花になりぬべし。されば、身は、たとひ、いかに卑しく、見苦しくとも、いかなる僻地に生ひ出づとも、其の心ばかりは、誠の道理を踏み、情深く、やさしく、靜なるべしとの意を詠める歌なり。

あはれ、この情、この心こそ、なべての女子の、かならず、持たでかなはぬもの

なりけれ。

世に、隆替盛衰の變あれば、人に、榮枯禍福の運あり。事や、物や、常ま、定あらずと、日に、月に移り變るとも、人の情と、心とは、之に從ひて、移り變るべきまあらず。若、これとゝもに變らば、遂に、無情となりぬべし。

されど、なべての世の人は、皆、この輕薄無情の風俗に慣れ染みて、却りて、有情多愛の風を厭ふ念あり。さればにや、往々、自、好みて、無情の人と爲るもの多きが如し。あはれ。

人、誰か、終ま、無情を好むものならん。豈、無情にて終るべきものならん。

人生の和は、情を以て成るものなり。ことに、女子の境遇は、最、この情を以て勝れりとするものなり。さるを、今は、學問をもなし、智識をも磨きて、才能の

長けたるものにて、其の質樸ならず、順柔ならず、却りて、輕薄を喜ぶもの多きは、これ、將、學問そのものゝ罪ならむか。

かにも、かくにも、人情は、いかにして和ぐものなるかを、深く省み察へよ。然せば、必、大に得るところあらん。世の婦女子たち、その身は、いかに卑しくとも、いかなるところに在りとも、その心を、花となさんことこそ、終生の覺悟なるべけれ。之を忽にせば、定めて、無情の人となりなん。たとひ、有情の花となりて散るとも、無情の人と爲りて生くること勿れ。

論説

音藝、花生、及茶の湯に就いて（上）

高津鍬三郎

女子の心得べきこと、いとも多けれど、上中下の階級に通じて、實際に必要なるは、裁縫料理等のことなるべし。上等社會にては、家に、召使も數多あり、且、専門の事には、それ〳〵出入の者ありて、裁縫は、仕立職に命じ、料理は料理人あるべければ、日常、いさゝかの不便なく、隨ひて、自身に、手を下して、衣服の世話、食物の鹽梅などをすることもあるまじけれど、全くその道を知らでは、人に命ずることも出來ざれば、不便を感ずることも多かるべし。女子は、到底、獨立して、世を經べきものに非ず、必、妻となりて、家内を治むること、その本分

なれば、いづれにしても、衣食のことは、一通り知らざるべからず。實に、この二は、女子にとりては、讀書、算術などよりも、必要なり。

然るに、如何なる故にや。特に、都會繁華の地にては、殆、上中下の差別なく、女子の教育に就いては、獨、琴、三味線等の修業にのみ、心を傾け、これが爲には、身分不相應なる金錢を費し、甚じきに至りては、一家の財産を傾けて、顧みざるものあり。かくの如くして、何の得るところかある。人、或は云はん。音藝は、人心を感化する力の至大なるものなり。之を習ふところの女子をして、その心を優美ならしめ、家内の者をして、愉快ならしむと。表面上の理屈は、さることながら、實際に至りては、却りて、年頃の女子をして、淫風に感ぜしめ、遂には、その一身を誤るの誘因となること、余輩の、屢、見聞するところなり。世

間の父母たる者も、また、我々とひとしく、かゝる實例を見もし、聞きもして、その利害得失を熟知せるならん。然も、なほ、かくの如し。また、特に怪しむべきは、男子の教育には、一錢を費すことをも吝む者にして、その女子に對しては、全く、別人の如きものも少からず。これらは、畢竟、その女子を愛することの甚しきものといはんか。或は、その子を、翫弄物とする者なりといはんか。はた、また、狂氣せるものなりといはんか。余は、その父母の心中を解するに苦む。そもそも、音藝は、最、優美なる技藝の一にして、その感化力の大なるや、目にみえぬ鬼神をも、あはれとおもはせ、猛き武士の心を慰むるのみかは。惡人をして、その心を改めしめ、臆病なる者をして、勇氣を起さしむるに足る。然れども、かゝる効果は、その專門家にして、その道の奥を究めたる名人上手といはるゝ人

の、稀に爲し得べきことなり。常人の企て及ぶところに非ず。されば、かゝる効能あらしめんとて、之を學ぶは、心得違なりといふとも、恐らく、不可なかるべし。さはいへ、余は、女子をして、音藝を學ばしむること、不必要なりとはいはず。寧、或る程度までは、之を學ばしめんことをすゝむるものなれども、專、この一藝にのみ、全力をそゝがしめんことを願はず。他に、これよりも、一層、實用的にして、女子の學ぶに適當なるものあれば、今日、主として、音藝を學ぶに用うる力を分ちて、これらの諸藝を學ばしめんことを希望するものなり。人あり。そのものは、何かと問はば、余は、先、花生と、茶の湯とを擧げて答へんとす。世の、音藝に心醉せる女子、及、その父母、少しく注意して、音藝の用所を觀察し、且、そのはじめ、如何なる趣旨に因り、いかなる目的に向ひて、

之を學ばしめたりしかを熟考せよ。蓋、思ひ、半ますぐるものあらん。それ、女子の、未、嫁せざるや、その父母は、實に、掌上の玉、かざしの花として、之を鍾愛し、なるべく、美服を着せしめ、なるべく、藝づけて、人の親に羨まれ、褒められんことを希はざるものなし。この時に當り、なべて父母の心中には、ただ、この希望より外のものはあらじ。數年來の經歷に徵するに、世の父母をして、その愛女の敎育法を變せしめたるものは、實に、世人の毀譽褒貶に外ならざるが如し。語を換へて云へば、誰も、皆、世の流行に隨ふのみ。英語がはやれば、英語を學ばしめ、洋服がはやれば、洋服を着させ、或は束髮、或は踊、その事の何たるを問はず、その實用の如何を顧みず、單に、流行を追ひて、人後に落ちんことを恐るゝのみ。これ、少くとも、女子をもちたる都會の父母、特

に、中等社會、及、それより以上の父母の心中ならん。その愛女の教育法に就いて、始より、一定の見識あるものは、殆、なきが如し。無學にして然るかといふに、決して然らざるなり。思ふに、維新以來、社會の事物、一變して、女子教育の方法の如きも、未、定まる場合に到らず。實際は、なほ、試設の時期にありたればなるべし。また、社會の先達として仰がるゝ人にても、その女の教育に就いては、獨立獨行すること能はずして、世と共に押移れるが多きを見れば、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな」と、古人の云へるは、古今、賢不肖の別なく、實に、さることとぞ思はるゝ。されば、女子教育法の、屢、變りたるは、單に、社會の風潮に扇動せられたるのみともいふべきなれど、その社會の形勢の移り變りしには、その原因なくはあるべからず。即、洋風の

生活は、未、我が國民の習慣と、資力とに適せざるところあれば、彼に適切なる教育法も、我には、不都合を感じたることあり。これ、なほ、夏の衣服はいかに美なるのも、冬には適せざるが如し。今や、明治の御代も、將に、三十の齡に垂とす。その間には、既に、幾多の經驗を歷て、女子の學習すべき學藝に就いても、その種類の程度の如何を悟り得たるもの〻如し。されど、猶、世間の風潮によりて、其の學ぶべき學藝を撰び、實際、そのもの〻利害得失を、詳にせざるが如き傾向なきにはあらざるなり。

徳川時代女子教育史評論（十四）

岡崎遠光

三、同時代の教育家、及、教科書。

第一期　姫鏡。　此の書の著者は、姓を、中村といひ、名は欽、字は敬甫、俗稱は七左衛門。其の惕齋といふは、號なり。紀元二千二百八十九年(寛永六年)に生れ、二千三百六十二年(元祿十五年)に歿す。著述は、大凡三十部、二百卷ありて、此の書、及、四書鈔説、讀書要領、大極圖説筆記等、最、世に聞ゆ。此の人と、世を同じうしたる學者は、徳川光圀、僧契冲、木下順庵、伊藤仁齋、貝原益軒、北村季吟等、その尤なるものにして、芭蕉、其角、近松門左衛門等も、亦此の頃、其の筆花を匂はせたり。而して、女流社會には、美津女の俳諧、天の美を奪ひ、園女の磊落、心の眞を吐きし。将、大橋が妙麗の文、通女(井上)が圓轉

の詩、何れも、皆、其の資性によりて、此の時、詞花言葉をたゝかはせり。かゝる時代に、徳川時代女子教育の本尊たる惕齋先生が、如何なる主義を抱き、如何なる教育法を實施せんとしたりしかを研究するは、啻に、面白味の深きのみにあらず、今日、また、まさに、必要の事なりと信ず。

今、彼れが、女子を教育する順序を按ずるに、左の如し。

一、生前　胎教を行ふ。

二、赤子の時　須らく、褓母を撰ぶべし。此の事、最、肝要なり。

三、物を食ふ頃　柔和を主とす。

四、六才　數へ方、方角、又、手習をはじむ。

五、七才　漸々、男女の別を正しくす。始めて、讀書の門に入る。又、

六、八才　德、言、功、容の四德を敎ふ。閨の戸を出でず。讀むべき本は、小學、大學、論語、孝經、列女傳、女誡。

七、九才　古書の意義を敎ふ。

八、十才　裁縫、紡績、應對、祭禮の供物等を、心得しむ。

九、十四才　許嫁するも、よし。

十、二十才　嫁する、よし。

こは、惕齋の理想にして、六、七才の頃より、習字、讀書を敎へ、八九才より、古書の中にて、最、德育に關するものを敎へ、十才に至り、始めて、裁縫、應對の事に習はしめたるなどは、今日の、敎育法と、殆、異なる事なし。但、男女の區

別を、嚴格にすべしといふ儒教主義より、八才の、いまだ、物心も出でざる女子をして、閨の戸をさへ出ださしめざるは、甚、束縛の弊あり。而して、十四才の、やうやく、情を解せんとする頃、許嫁せよといひたるは、その何故を解く必要なし。又、二十才の頃が、嫁するに、適當の時にして、その以前は、女子の身體も發達せず、智識も增進せざるものなれば、先、控へよといふは、教育家が、常に、生理上より論ずる處なれば、こゝに、予が贅辯を要せず。予は、我が二千萬以上の婦女子諸君が、よく、早婚の害を知得して、身體發達し、學術成就して後、良夫を迎へ、國家の爲に、麒麟兒を產出せんことを、希望して止む能はず。

明治今日の教育家は曰はく、古の家庭教育は、甚、不完全なり。即、世に、ゐあ

らぬ鬼を作りて、先、小供に、虚言を敎ふ。而して、其の父母は、これを覺らずど。然れども、二百年の昔、惕齋先生は、之を看破して、曰はく、『或は、あはし、其の泣聲を止めんとて、これ、得さすべし。かれ、與へんと慊すは、後に、欺罔の種となる。或は、言ふ事聽かずとて、畏しき事共して、度々、おどし入るは、これ、臆病の基なり。或は、氣に逆ひたる物を、理を曲げて、空撃などして見するは、これ、傲慢の基なり』などといひたるは、實に、小兒に取りて、最、戒むべく、父母長上にとりて、特に注意すべき家庭敎育の本旨をいひたるものなり。然るを、今の敎育家は、古の敎育家よりは、百尺竿頭、一歩を進みたるものなりと自信して、我は顏して、老爺、耄婆の詞を非難し、而して、古人が、曾て、こゝに、意を注ぎたりしを知らず。『傲慢』の種を蒔くものは、實に、淺薄

なる教育家、その人なり。
惕齋先生は、かくの如く、傲慢、欺罔等の不德は、小兒の時より戒むべき事を述ぶる、再三にして、更に、人生は、德行第一なる事を述べて曰はく、『德、外に現れて、能く、理を悟り、能く、事を計り成す。是をば、才と名づく。德は、體なり。才は、用なり』と。則、女子、既に、德を備ふれば、人生の事、完全無缺まして、才は、これより分出せられて、德の用たりとなし、古語に、男子、德あれば、則、是、才、女子、才なきは、則、是、德。といへるを採り來りて、人生、德あれば、世人、已を目して、泰山北斗となすが故に、其の才の如きは、招かずして至らん。殊に、女子は、内に、操を守り、外に、人に從ふが、本分よて、衣食を營む外、其の才を施す所なし。されば、才能あるやう生れたる女子

も、却りて、其の才能を、外に現さずして、唯、心の中に、徳を蓄ふべし。故よ、才なきが、是、徳なりと。説明せり。

松平樂翁公も、此の主義にて、なくてよきものゝ中に、女の才を加へられたり。明治の大御代となりては、智識才能を開發するは、徳行を涵養すると共に、肝要にして、才なきは、是、徳といふ主義は用うべからず。男にても、女にても、才智ありてこそ、國の爲、家の爲に、その功績を顯すなれ。然れども、才ある女は、兎角、人を侮り、長上を無みする事、世俗の習なれば、學を修め、業を卒へたる女子諸君は、才なきは、是、徳とさへ教へられし事を追想して、才がらさる、是、徳なりと心得よ。

何、惕齋先生の謂はゆる徳とは、今日の謂はゆる智育、徳育、體育の德にはあ

らずして、非常に、廣義の德なり。行を正しうし、詞を丁寧にする外に、女の藝術に通じ、衣服を、花奢にせざる等、皆、婦德の範圍なり。即、智育の過半を、德育の中に入れたり。故に、德といへは、才は、自、その中に含まれたるなり。

（未完）

女子教育に就きて（五）

山崎庚午

社會事物の改良

教育者は、社會百般の事物に就きて、深き注意を爲さゞるべからず。學校に於いて、家庭に於いて、善良無比の教育を施し得るとするも、教育を受くる所の兒女にして、一旦、社會種々の事物に接し、其の影響を受くるに當りては、社會事物

の善悪如何は、教育の効果上に、莫大の關係を及ぼすべし。故に、教育者は、狹意の教育業務に、力を盡すのみならず、併せて、又、廣意の教育方法に就きて、其の意を注がざるべからず。既に、社會の事物中に、不善不良のものあるを知らんか。其の事物をして、教育の効果上に、影況を及ぼさざらしむる方法如何、又、其の事物のうち、善きものをば、之を利用し、悪しきものをば、之を改良する方法如何等を考察するは、實に、教育者、最大の任務なり。彼の、徒に、學理的教育法のみを研究して、其の實際の應用上に、意を用ゐざる教育者は、未、眞に、教育業務の何たるを知らざる輩のみ。

女子は、なべて、感情深く、思想弱きものなれば、女子の教育効果上に、社會事物の、影況を與ふること多きは、疑を容れず。玆に於て、女子の教育者は、益、社

會事物に就きて、精密の觀察を爲すべきなり。

我が國の社會事物は、盡、最良のものたるか。余輩は思ふ、その多くは、不善、不良、弊害の及ぶ所、一にして足らざるを。殊に、女子教育上に、大妨碍を與ふることを。これ等の事物、固より、數葉の紙、盡、之を論ずべきにあらねば、今、其の大概を擧げんに、曰はく、演劇、俗樂、小說、淨瑠璃、俗謠等、その最なるものなり。演劇には、卑猥のもの多し、之を改良し、若くは、禁止せざるべからず。殊に、彼の二十四孝狐火、お染久松等の劇に至りては、人をして、一見、嘔吐を催さしむ。かゝることを、未、思想固からざる女子に見聞せしむる結果、其の弊害の大、蓋、知るべし。且、現今の俳優と云ふもの、卑俗、猥亂、品行修めず、德義踏まず、寔に、侏儒の輩のみ。されば、演劇改良と共に、又、俳優改良

を爲すの必用あり。俗樂、俗謠の卑猥なるは、人の知る如し。改良の、一日も速なるべきもの。次に小說も、之を改良せざるべからず。固より、彼の馬琴翁等の如き、勸善、懲惡の本意を得たるものは、吾人の、最、欲して止まざる所なりと雖、小說の多くは、淫靡に流れ、卑猥に失す。徒に、表裝の美に、人目を眩せしめ、内部の如何を顧みざる當世者流の如きは、吾人、其の面に唾せんと欲す。

然れども、余は演劇、俗樂、俗謠、淨瑠理、小說等を以て、盡、取るべからざるものとするにあらず。唯、其の中の惡所を改良し、卑猥の分子と、淫靡の性質とを取り去れよとなり。お染久松の演劇。三絃の鄭聲、お俊傳兵衛の儀太夫、梅暦、其他多くの小說等が、世に、害毒を流すこと少なからざるを慨するのみ。

人、或は曰はく、小說は、文學の中、最、秀でたるものなり。小說は、美といふこと

と、關係深きものなり。さるを、世人、稍もすれば、小說を以て、淫靡とし、卑猥と罵ること。夫、然らん。然れども、如何せん。小說の流弊は、實に、淫靡となり、卑猥に流れしを。淫靡、卑猥、之を知りて、猶、且、小說を改良するを欲せずは、其の人も、亦、淫靡、卑猥ならんのみ。余は、我が政府が、西鶴全集の發賣を禁止したるを喜ぶ。余は、切に望む。今後、若、淫靡、卑猥的の小說を著はすものあらば、啻に、其の書の出版を免さゞるのみならず、併せて、又、其の人をも罰せんことを。小說を好むの世人、口を開けば、直に、美といふ。されど、美の意味は廣し。忠孝仁義を以て人道の美となす。然も男女の戀愛も、亦、人道の美ならざるを得ず。忠孝仁義を唱道して、人に敎ふるものあるを知る。未、男女の戀愛を說きて、之を行へよと云ふものあるを聞かず。唯、漠然と、美とのみ云ひ

て、之を、人に勸むるは、却りて、人を過るものなり。小說、寔に、改良せざるべからず。

世の敎育者は、啻に、表面的、形式的の觀察を爲すのみを以て滿足せず、又、大に、裏面的、精密的の考察を遂げ、眼を、一局部に注がずして、意を、全體に用ゐざるべからず。何となれば、敎育といふことは、頗る大業務にして、其の關係する所、亦、極めて廣ければなり。

（完）

史談

巴御前

大町桂月

巴女が絕世の勇女なることは、人皆、これを知る。その千古の美婦なることも、人皆、これを知る。されど、その婦德にいたりては、往々、之を疑ふものあり。或は、

輕々しく、野乘稗史の説を信じて、巴女は操を破り、和田義盛に嫁して、朝比奈三郎義秀を生みたりとなすものさへありて、巴女の眞相、未だ世にあらはれず。絶代の烈女の爲に、深く慨すべきなり。

巴女は、中原兼遠の女なり。雲の八重立つ木曾の山中に人となりたれども、竟に、樵夫牧豎と伍を同じうせずして、勇名を萬世に流せるものは、實に、家庭の素あるによれり。父、兼遠は、義俠なる武士なり。寄邊なき孤兒なる木曾義仲を鞠育したるは、此人なり。義仲の父、義賢は、惡源太義平の爲に殺されにき。義仲、時に、年二歳なりけり。義平、畠山重能に命じて、之を殺さしめんとしけれども、重能その幼孤なるを憐れみて、之を齋藤實盛に托す。實盛、關東に隱すに由なきを以て、之を木曾山中たる中原兼遠に托しけるに、兼遠は、勇み之を引受けて鞠育したるなり。されば、義仲が生命を保つことを得たるは、兼遠の力にして、其義兵を擧げたるも、亦、兼遠の力によらずんばあらず。彼の義仲の四天王の中にて、樋口兼光、今井兼平の二人さへ、兼遠の子なり。就中、兼平は、四天王、第一にして、忠勇無双の豪傑なりけり。兼光は、その終を善くせざりきといへども、亦、一世の勇士なりけり。

かく義俠なる兼遠を父とし、かく勇猛なる兼平、兼光の二人を兄としたる巴女は、その家風の感化を受けて、絶世の勇女となれり。兼遠にして、始めて、巴女あり。巴女の如き烈女は、決して突然として草深き山中より出づるものにあらず。家庭の薫養の必用なることは、これを以て知るべし。巴女は、兼遠の女にあらずして、一土民の女なりといふ俗說あれども、出處なければ、取らず。

巴女は、木曾義仲の妾にして、兼ねて、義仲の軍の一方の大將なりけり。軍あれば、必ず出でゝ戰へり。戰へば、必ず勝てり。義仲の寵愛は世にすぐれぬ。そは、其色よりも、寧、其勇を愛したるなり。かくて、義仲は、元曆元年、武運つきて、京師を落ちぬ。從ふもの、わづかに十三人なり。巴女も其中にあり。三條川原に至りけるに、畠山重忠大勢を率ゐて追ひ來れり。義仲馬を返し、川を隔てゝ、射合ひけれども、衆寡敵せずして引き退く。重忠勝に乘じて攻めかく。義仲も引返し〳〵、或は弓戰となり、或は太刀打となり、追ひつ、返しつ、戰ひけり。此時、巴御前は、萠黃糸縅の鎧に袖付けて、五枚甲の緒を締め、射殘したる鷹の羽の征矢負て、滋籐の弓を取りもち、葦毛の駒の太く逞しきに、巴摺りたる鞍置て乘りけるさま、いと

花々しく見えけるが、その弓に虚發なく、その太刀先も鋭くして、見る間に十數人を射殺し、切倒して、縦横無盡に馳せまはりければ、流石の畠山も敵し得ずして、川原まで引き退きぬ。巴は猶進みけるに、畠山之を見て、側なる榛澤六郎に向て問ひけらく、われ、戰に臨むこと、其數を知らずといへども、未だ、かくばかり猛き武夫に逢はず。木曾の軍中には、四天王あることを聞きたるに、此人は、今井にあらず。樋口にあらず、楯にあらざれど、根井にもあらず。そも、何人ぞやといへば、彼は、さる丈夫にあらず、音に聞えたる勇女、巴御前にて候といふ。さては、如何すべき。女に追ひたてられては、萬代の恥辱なり。また、女と組討ちて不覺を取らば、猶更、恥辱なり。巴女に逢ひたることそ不運なれ。されど、義仲の妾と云へば、敵に取りて不足はなし。必ず組伏せて虜にせむ。返せ〳〵と、高く呼はりて、軍を返し、少しもみあひけるが、畠山は漸く巴に近づき、馬に一鞭あてゝ馳せより、直に、鐵の如き腕を延ばして、巴が左手の鎧の袖を、しかと攫みぬ。流石の巴も、其强力に恐れ、馬を躍らすよと見えけるが、畠山の手には鎧の袖ばかり殘りて、主は逸早くも逃げのびにけり。畠山はたゞ驚き、こは、たゞ人にあらず、鬼神の振舞とこそ

覺ゆれ。長追しては、惡しからむ。戰も、今は是迄ぞとて、引き返せりとかや。巴の勇力、實に想ふべし。巴は、我國第一の勇女たるに愧かず。

それより、義仲は、あは、此處彼處を打破り、東をさして落ちゆきけるが、四宮河原にて、其兵を驗すれば、わづかに、七騎となりにけり。神無社、關の清水、關の明神なども打過ぎて、粟津に向はんとて、關寺の前を過ぐ、此時、巴猶從ひて、七騎の先陣に進めり。五枚甲は何處にか脫ぎ捨てたりけむ、身長にも餘る綠の黑髮を、後に垂らして、春風に吹き流さるゝさま、さながら、青柳の糸の靡くが如く、いと、優になまめきたる姿なり。茲に、遠江國の住人、內田三郞家吉とて、名だゝる勇士、東國一の美男と稱へられたる壯年白面の武者、三十騎あまりを率ゐて、はたと行き逢ひたり。三郞、遙に巴の姿を見て、木曾の軍中に、巴、山吹とて、二人の勇女ありけるが、山吹は、去年、礪並山の合戰に討死したれば、彼の女將こそ、たしかに、巴なれ。巴、たとひ、無双の强力なりとも、よも、百人の力はあらじ。我力は六十人を兼ねたりともてはやされけるに、三十餘人の郞等あれば、打取ること、いとやすしとて、いさみて進みけるが、又、思ふやう、一の人女を打取るに、多勢の力を借

りては、武士の名折なり。いざや、運を天に任せて、一騎打の勝負を決せむとて、馬を馳せて、巴に近寄り、互に名乘りかけて、勝負を一時に決せむとす。一は木曾第一の美人にして、一は東國第一の美男なり。殊に、兩人とも、音に聞えたる剛力なれども、洵に花々しき組打よとて、兩軍しばし眸を凝らしたり。兩方より馬を寄せて、ゑいやとをかり聲をあげて、馬上ながらに組み付き、しばしが程は、もみあひけるが、巴の力やすぐれたりけむ。いちはやくも、内田が甲の眞甲つかみて、鞍の前輪に引きつけ〳〵、七寸五分の腰刀を拔くより早く、時ならぬ電光をきらめかして、水もたまらず、敵の首をかき切り、一障泥あをりて、馬を返せば、内田の亡骸、馬より落ちて、湧き出づる鮮血、さながら瀧の如し。巴は、内田の生首提げて、義仲に謁しけるに、義仲之を見て、覺えず愴然として涙を催し、あはれ、六十人の力を兼ねたりと世に歌はれたる勇士も、運窮まりては、一女子の爲に打たれぬ。げに、果敢なきものは、人の身の上なり。余も、亦、如何なる人の手にかゝりて相果てむとすらむ。今ははや是迄と思ふに、朝日將軍とも云はれたる此身が、末期まで女子をつれたりと言はれむは、口惜しく、末代までの恥辱なり。汝は、女なれども、落ち

延びんこと、いとやすし。暇を取らす。唯、速にのがれ去れといへど、巴、涙をはら〳〵と流し、思ひもよらぬ御言葉をうけたまはるものかな。そもや、君にかしづきまゐらせてより、おどろの奥、いばらの下なりとも、唯、君の行きまさむ處に從ひて、生死を共にせむとこそ思ひまつれ。君の御最期にのぞみて、おめ〳〵と生きて遁れとは、御情に似たれど、中々に恨めしく思ひはべり。妾の一命は、巳に、君にさゝげまつりたり。君を先立てゝは、生きながらふとも、何の甲斐かはべるべきとて、從ふ氣色あらざれば、義仲は、いらだち、我が恥辱なりといふに、それをもかまはで死を共にせむとするは、貞節に似て、中々に、我が仇なり。信濃なる妻子に我最期をかたり、かねて、我が爲に菩提を弔ふべきもの、汝ならでは、他になし。我最期の思出はこればかり。この道理をきゝわけて、命を全くして故郷にかへれよと、さとさるゝに、辭まむ由なく、泣く〳〵別を告げて、見返りがちに立ち去りけり。

旭將軍と呼ばれて、朝日の昇る勢ありし義仲も、運命、夕陽と共に傾きて、暮雲影冷かなる粟津が原、無常の矢風に、あへなくも、一片の露と散りぬ。巴は上の山に

ひそみけるが、軍終りて後、鎧、ぬぎすてゝ小袖の女姿となり、君がうせにし跡を顧みて、いくたびか、吊悼の涙を春風に揮ひ、草に臥し、露にやどりて、やうやく國に歸りぬ。時に年廿八。かたく、身を持して、義仲の冥福を祈りけるが、後、尼となり、越後の友松にうつれりといふ。

世上の俗說に曰く、後、賴朝、巴を召し出して、殺さむとしけるが、和田義盛の請により、その死を許して、義盛の妻となさしむ。朝比奈三郎義秀は、卽、その生む所なりと。されど、此說の誤れる一例を上げむに、和田氏の亡びしは、建保元年にして、義秀、時に三十八歲なり。而して、義仲の討死せしは、元曆元年なれど、逆算するに、義仲の討死せし時、義秀は年巳に九歲に當るなり。これを見ても、義秀は、巴の子にあらずして、巴もまた、義盛に嫁せるにあらざることを知るべし。こは、獨、余の說にあらず。大日本史も、此說なり。明治の詩宗と呼ばれたる大沼枕山翁も、此說を取りて、巴を咏ずる一律をものせり。その詩、いとめでたく、巴の節義をときたれど、左に錄す。その詩にいはく、

君主粟津指似氷　阿儂訣別只兢々　獨歸岐岨欽眞史

花嫁和田笑野乘　昨日鞍頭戕勇士　今朝庵裡學閑僧
將軍親故相逢處　悵望湖城說舊曾

此前聯の意味を平易にいへば、巴女が岐路にかへりて、節を全くせりとは、眞史の説にして、喜ぶべし。和田に嫁して、操を破れりとは、下らぬ草紙の説にして、笑ふべく、取るに足らずとなり。本朝列女傳には、之を知らずして、巴の操は取るに足らねど、其勇を取るといへり。こは、いみじき僻事なり。女子に取るべきは、操なり。決して勇にあらず。操なければ、鬼を挫ぐ勇ありとも、取るに足らざるなり。すべて、女は、顏は醜しといへども、勇はなしといへども、女德をだに備へなば、烈女として、欽慕するに足る。女子は實に社會の根本なり。世に女德ばかり切要なるものはなし。古今東西の興廢の跡を討ね來て、余は斷言す。女德、上下に充滿して後、健全なる社會は、始めて生み出さるゝものなりと。

濱田某が妻の事　桑名壽子

濱田某妻は、何某氏の女なり。賢にして智あり。夫某は、北國大名の家に仕へし

が、江戸在番の留守に方りて、妻出産の紐を解き、未、七日も立ざりけれど、産家の枕にかゝり居けるに、或日、健に見ゆる一人の男、血刀提たるまゝ、産家へ駈込、拙者事は、朋友と爭論の上、堪忍なり難、討取りて立退しが、跡より四五人追者ありて、殆、危所を、纔に切り拔け、是迄、遁れ來り、御邸と見て、御門内へ馳せ込みしが、御家來も見當らず、願申すべき便もなきに、後よりは、追手火急なるまゝ、無禮なれども、此の處迄推參せし者にて候。志願ある身に候得ど、一先命を全し度候。御匿くださらむ、生前の御恩なりと、平伏してぞ願ひける。妻、つく〴〵と聞き、私事は、濱田某の妻、夫參勤の留守に出産いたし、御覽の如く、取亂し居候。委細の譯は存せねども、此の邸と見て、御賴とあれど、隨分かくまひまゐらすべしと、かひ〴〵しく援き入れて、我が倚掛る枕の後に忍ばしめ、其の上に、夜着打覆ひて、初の如く倚り掛り居ける所へ、士四五人、ひら〳〵と入り來り、大音上げて、只今、此の邸へ、人討たる者を付込たり。隱し給ふとも詮なし。有の儘に出だし候へと呼ばはりける。妻は、眠れるが、今覺たる體にもてなして、眼を開き、各方は、何人なれば、女の寢間に入りて、理なき事を宣ふぞや。夫の小身ものゝ故、下女

一人のみ召使ひ、しかも、今は、在番の留守に侍る。殊に、私事は、産後のなやみにて、枕も上らず候ものを、何迚、人をかくまふなんど。其等の儀のあるべきぞ。裏に出口あれば、通り抜したらんもしらず。先、其よりは、各方、實の武士ならば、武士の作法を知給はぬ事はよもあらじ。如何なれば、女子ばかりの家へ、無案内に押込のみならず。女の寢間迄踏込みて、無禮の挨拶には及むるゝやらむ。そも、何方の御家中にて、名は何と申す人ぞ。女なれども、武士の妻、其の分にはなりがたしと云ひつゝ、有合絹にて鉢卷し、小褄引き上げ、なげしの長刀押取り、鞘を拂ひて立向ふ。追手の輩、大に驚き拜伏し、仰の趣、至極御尤なり。我々、心急くまゝに、前後を辨へぬ振舞、殊に、御産家に押込み騷がし申せし段、不調法の至、眞平御免くださるべし。いな、其は卑怯なり。眞の武士ならで、心付なくてやは。さなくば、眞の武士ならで、女子計と知り推し込たる盜人ならん。盜人の惡名受ることを、口惜しくも立ち上がりて、潔く、勝負せよやと、詰寄たり。衆、皆、更に、平伏し決して手向はいたすまじ。御圍なき段も、見屆け候上は、無禮の程、幾重にも、御高免くだされかしと、打詫ながら、這々の体にてぞ逃出だしける。妻は、夜更て後、

彼の男を助出し、今宵御宿いたしたく思へども、女子ばかりの事なれど、世間の聞え、夫への遠慮、かた〴〵心に任せず。裏門より、忍びて何方へなりとも御出あれど、人を討ちし趣意、相手の名、はた、其の者の姓名をも、能く聞き糺し、湯漬飯を與へていたはり、下女をして、門の外を窺ひ見せしむるに、仔細なかりけれど、道の案内ねんごろに教へて、裏門より出しける程に、此の男、厚く活命の恩を謝し、且、産婦の働き美事なるを感賞し、別を告げて出去りぬ。此の事、妻は下女に口留し、さりげなき風情にてくらしけるが、いつともなく、世に洩れて、聞く人、皆、天晴の烈丈夫と稱へけり。

古語に窮鳥懐に入るときは、獵師も是を捕へずといへり。此の妻の行、之を得たり。其の彼を待つ所以を見るに、智にして、義あり、禮にして勇あり。節操全く道理正し、豈、稀世の賢婦人にあらずや。吾曹は、偏に諸書の其の名を欠くを惜むなり。

漫錄

才女逸話（承前）

山崎庚午

千代能

千代能は、足利貞氏の妻にして、金澤顯時の女なり。幼より學を好み、頗、文才あり。姓、風雅を好み、常に、俗物と交らず、且、佛に志し、僧、夢想に就きて、禪學を修め、好みて座禪を事とせり。然れども、未、全、頓悟の境に至らざりしかた、自、之を憂ひしに、一夜、出でゝ井に汲み、桶を頭に、戴きて家に歸るに、戴ける桶の底、拔けて、其中の水、千代能が頂に溌げり。此時、はじめて、頓悟して、夢覺めたる如かりしといふ。

其時、口吟みて曰く、

千代能がいたゞく桶の底ぬけて
水たまらねば月もやどらず

斯の如く、文才卓越、氣象優高の婦人なりしかた、其作れる歌、文、才氣漫々として、男子のをも凌ぐ。うち、殊に、「地獄極樂論」一篇を以て、優れたりと爲す。これ、世の學者の、稱賛して止まざる所なり、其文に曰く、

夫れ、地獄遠きにあらず、極樂、亦、眼前なり、人壽百歲、古來稀なるに、秦皇、漢武、長生を求めんとするも、徒らに、千歲の笑を貽し、彭祖が一掬の菊水に、八百歲を露の間に保ち、東

方朔が一枝の桃、三千年を瞬息に過す、短しとや言はん、盧生が邯鄲一睡の夢、五十年の盛衰は、長しとや言はん、鐵枴、琴高、今、何地に在りや、人間愛別の歎き、四大離散のかなしみは、誰とても遁れがたく、一朝無常の風、荒く吹けば、有待の花萎み落ち、一夕鼎湖の雲收り盡きて、蒼梧の霞隔るこそ、有爲轉變の習ひなれ、定め無き世に、いつ迄か生を貪らん、吾も亦眼前の極樂に移住せんことを翼ふ、されども因緣拙く女人に生れ、罪障さこそ深からめ、いとけなきより敷島の道のみ好み、栽ゑ蓄ける善根も無き身の宿業を滅せんには、何にか依らまし、戯えて辜科犯さゝれど、今、將、慚愧懺悔の山も有らず、恭しく思へば、大乘小乘異なりと雖ども、固より釋尊一世の說法、顯密一致、權實不二なる可し、特律の二百五十戒、天臺の煩惱即菩提生死即涅槃、密宗は大覺位より大日如來に至らんと求め、禪には見性成佛の悟道あれども、後世の凡夫企て及ぶ可きに非らず、在俗の身には、一世の羈束有つて、一日一夜八億四千念の一念も、道に渉らず、昨日も徒らに暮らし、今日も虛しく明し、適々心を靜めんとすれど、意馬暴れて六塵の境に馳せ、心猿飛で五欲の枝に移る、是れを脩めんとすれども止まらず、彼れを鎭めんとすれども治らず、七字の題目を唱へ、大乘妙典の功力に依て、女人成佛の素願を果さんにも、いまだ二十八品の會得無し、倩、思へば易行難行の淨土門には、一念十念、念佛

さへ唱ふれバ、戒も無く學も無く、決定して樂土に至ると有れど、一文不知の尼入道も、念佛衆生の群に加はり、一枚起請を目的に、忽ち業障の雲を晴らし、攝取不捨に洩ること無く、實相眞如の月を眺めんと、是れぞ切りに願はしく候、あなかしこ、

古來庵存義が母

古來庵存義は、何氏なるかを詳にせず。世の傳ふるところに由れバ、寶暦明和の頃、江戸に時めきし連俳の宗匠なりといふ。其母は非凡の才女にして、連俳の道に熟し、且、頗、文に巧みなり。惜哉、亦、其傳を詳にせず。今、こゝに掲ぐるは、存義の母の、存義に與へて、人道を說けるもの、文章、平易にして、條理、井然として整ひ、一篇短しと雖、說くところ、懇切にして、又、精確を極む、文學上の文字としても、教育上の文字としても、寔に、得易からざる傑作といふべし。

古來庵存義に與ふる書　母、

人に五倫あり、主従、親子、夫婦、兄弟、朋友の五ッにおわしまし候、主人は家來に禮義を亂さず憐れみを垂れ、家來は主君に忠義を盡して私し無く、親は子を慈しみ誨へ、子は親を尊び孝し、夫は柔和に妻を導き、妻は夫に貞節を盡し、兄は弟を友とし愛しみ、弟は兄を敬ひ悌がひ、朋友は相互ひに信實を盡す、是を人の人たる道といふ、此道に背くを、主人に不禮と云ひ、家來に不忠、親ゝ無慈悲、子に不孝、夫は不和、妻に不貞、兄に不友、弟に不悌、朋友に

不信實といふ、總ては是れを人の面にして獸の心と云ふ、倭國唐土の許多の書籍、古の聖り賢き人の說き敎へられし處、皆此道にこそ候へ、殊には小學と云ふ書に委し、國有れど人有り、人有れバ敎有るならひ、琉球國の先の王、六に諭し、人倫の道を敎へられしを、後に彼國の大臣猶其言を說き述べて、六諭衍義と題し、荻生先生の點本近來專ら行はれ候、講談を承り候所、俗の耳に入り易く、然かも古の聖りの敎へ給ふ意を離れず、能くも諭されたる者なれバ、婦女は內を治むる者ゆゑ、常々承はつて、家道に益あるべきこと少からず覺へ候まゝ、一筆御勸め申し參せ候、畏く、

雪中激戰　　横井知萬多

見渡す限、野も山も雪ふりつもりて、淸きこと鏡をみきたらむが如し。かゝる折は、敵の襲ひ來むこともやと、十數騎の斥候兵は、何れも黑く裝ひ、こゝかしこに立ちわかれて進むに、雪はなほふりやまず。見る〳〵黑き裝は白くなりぬれど、はらはむともせず、深く進み入りぬ。斯る處よいづれの地より襲ひよせけむ。一群の敵兵は、一騎ももらすな、と銃うち始めぬ。わが斥候兵は、怒れる眼に朱を濺ぎ、咄、醜のたぶれ等、何程の事かあるべき。固より、我等は大君の命のまに〳〵出來れり、よしや、頰に痛手はおはゞおへ、いかで、背は見すべしやは、倒れむまでは、退くべきますら男ならねど、如何にせむ、今は職務を帶びて、

こゝに來れり。もし幸なくて、この雪に屍を曝さむか、名譽の死とはいはるべけれど、職務をしおはせぬ謗あるを。しかず、つゞかむ限は打拒ぎ、一方の路をひらきて、この内一騎たりとも、本營にこゝの樣をしらさば足りなむ。といひあはさねど、かねて心やあはせたりけむ。物どもうてやの號令よ、壯なる兵士等、いかで、たゆたふひまあるべき。うちあふ銃の響に、靜かなりし天地、とみに騷ぎだち、飛びたる彈丸は、降る雪とともに散りすさびて、紅白の梅の、あらき春の山おろしにあひたらむが如く、はせ交ふ馬の蹄の音こそたたね、鞍はらゝかすまがひに、甲は破れ砕けて、散り亂れたらむが如く、銃の烟は、清き雪を蔽ひ、天地くもりて、時の間に常闇となりぬ。衆寡敵し難く、わが斥候隊長は、馬をうたれ、其身も數ヶ所の痛手を負ひて、遂にどうと仆れけれど、卒は進みよりて、引起さむとするを、頭うちふり、息も絶々ながら、行け／＼、汝は職務を忘れたるか。一人の身を思ふ時ならず、とにらみしまなざし怒をふくみていと鋭し。さりとて、見棄てゝは、とためらふを、理をわかぬか、咄、され／＼、と烈しく、悲しき聲を殘して、息は絶えぬ。涙はらふ間もなく、せめては、と首かききりて持ちぬと見しまに、いづちゆきけむ、影もとゞめず。又一人まさりて、銃の響の烈しきは、斥候兵が本營にかけつけて、幾多の兵がよせ來にけむ。天柱も折れ、地維も缺ぐらむさまなり。あはれ、清きことゝ、鏡の如くなりし野も山も、見るまに、いまはしく、赤

しく、怒と恨とを含みて作れたる、敵味方の屍におほはれ、雪の色は、紅の色にそまりぬること、方幾里、深幾尺。あはれ、この紅の雪や、やがて、國のため、君のために、あるは彈丸に、あるは劍に、はかなく消えぬる、國民が赤き心の花。あはれ、其時ならぬ花は、史の上に殘りて、千代ちらず、萬代もあせぬ、國民が雄々しき名譽。

雨やどり

須賀廼屋主人

二月の半すぎのことなりき。一日外に出ることとありしに、折ふし、空俄にかき曇りて、雨いたう降りしきりぬ。往きかふ人々、おどろきあわてゝ、足を空にして、西に東に奔り行く。折よく、傘など持ちあはしたるは、指しかざし、それに二人三人すだきて、互に濡れじと、のゝしりあふもをかしく、物ゆたかに見ゆるは、車といふ物にのりて、いと落つきし面なるぞにくき。あはれ吾は、傘をもたず。履すらはかず。亦、例の足なくて奔る物もあらねば、せむ方なくて、とある軒端にたゝずみ、雨の晴るゝを待ちた。つくづく四邊を見まはすに、こはこれ、會堂とかいふものにて、吾が、日頃忌みきらふ耶蘇の教徒が、より集ふ家なりけり。穴をかし。夕立に法爭かけこむ阿彌陀堂の類かと、吾ながら、片腹いたくも可笑しく覺えて、獨ほゝゑみゐけるに、折しも、奧の方より、うちつけに、物の音聞えぬ。人あらぬと思ひしにぞ、驚きてふりかへれば、窓の戸の透間よりして、奧の方の、見ゆるとはなしに、いと能う見渡されぬ。あなうたて、

はの暗き片隅に、風琴によりて若き男女あり。互に腕さしかはし、節曲の浮きたる節奏で、折々何事をかさゞめきあひては、どよめき笑ひぬ。かゝればこそ、吾が日頃、かの徒を、蛇蝎の如くいみきらふなれ。あはれ、須賀〱しきみ國の大和撫子、惜しや、ふるあめりかに、色も香もあせ果てて、野荊、鬼薊の淺ましき姿となれりと、いと苦苦しく覺えて、なほも打守りてあるに、やがて空晴れ、雨もやみけれど、男は裏口より出で行き、表の妻戸押しわけて、立ちいづる女の姿よく見れど、ほの覺えある面にて、かつて、ある會の席に、婦人矯風の演説をなして、その頃、女丈夫の名聲えし女なりき。うたてき餘、

久堅のあめりか風のふきしより
　男女の川波さわぎそめけり

かく壁にかいつけて去りぬ。

幼兒を育つる心得

雨森芳洲

をさなき子を育つるみちは、這ひまはる時よりむしろの上におきて、心のまゝに這はせ、足すでに立ちたる時は、心しだいにはしりまはらせ、をさな子は、またぎ、はかまをきぬにせずといへるをしへに從ひ、若きものは、薄きかたにし、風にも日にもあたりて、そとがちに遊び、くひ物は、すぐるこそはあしけれど、おほかたは、その心に從ひてこそ、やまひもなく、すこやかに生ひたつべ

きに、富貴の家に生れしをさな子は、かしづき、もりなどいへるもの、おびたゝしくつきそひ、風ひき給ふべきや、御腹そこねさせ給はんや、または御けがなどもやといひて、やはらかなるものを、幾重も着せ、くひ物は、はかりにてかけなどして、道ひまはる時をはじめ、いだきすくめて、御うちがちにのみすれど、足のはたらきも、おのづから遅く、うち痩せ、はかもろく、思ひよらざる病おこりて、そだち難きことのみ多し。くすしはいふに及ぶべき、乳はゝ、もり、又はかしづきまで、かくはすまじき事ぞ、思へるあれど、もしは、御いたみありてはと、その身の事のみ思ひて、いひもいださず。あるは、おろかにして、上つ方の御子は、下さまとは、ちがひたりと思ふもあり。人の血氣をもて生れいづる、貴き賤しき、何事かかはる事あらんや。ふるき言葉の、これをうつくしむは、まさにこれをそこなふゆゑんなりといへるを、思ひあはせて、悲しくぞおぼゆる。

ある、年たけて子をもちし人、めづらしさのあまりに、屏風ひきまはし、よる晝となく、いだかせおきけるに、をりしも夏の事にて、みな〱あつさにたへかね、かはる〲していだきけり。三十日あまりして、黄疸のごとく、病みて死にけり。おとなのたへがたきを見て、をさな子はさぞと、思ふ心もなく、うつくしむのそこなふなることを知らねこそ、くちをしけれ。かゝる事、またあるべきにもあらねど、これに似たることは多しとぞ。

（たはれ草）

人々必ず一つのよき所ある事

常盤潭北

或る人問ふ。貴賤國々經歴し給ふ間、さだめて、よき人あしき人にも、あまた御付合被成候ふべし、御咄うけ給はりたく候。答へて曰く。我等ためし見候ふに、勝れてよき人も、すぐれてあしき人もすくなく、たゞ中邊の人多く候。いか樣なるあしき者にも、下賤の者にも、一所つゝは、必ず我等に增る所ありと存候。然れども、世上へ道の敎足り不申や、其性質のよき所を能く育つる事なく、世情人欲の私に任せ候ふゆゑ、よき所は埋もれ申候。先づ直なる者は、其直を以て人よあたり、飾りなき者は、無禮不實をいとはず、寬やかにして、物を容るゝ事の廣き者は、油斷に成り、物ごと氣の付く者は、人を尤め、理にさとき者は、爭ひを起し、儉約なる者は、吝嗇に傾き、心よき者は、懦弱に落ち、無欲なる者は、家業を怠り、大量ある者は、かゝり事して殆く、實體なる者は屈し、才智なる者は人を見下す。是みな結構なる性質を持ちながら、敎を聞かず、道を知らざる故、其よき所が、却て胸の理屈となり、人にもあたり、身も安からず候。又今一等よき人あり、人のために能く謀る人あり、人の非をとがめぬ人あり、堪忍づよき人あり、務めを大儀がらぬ人あり、行儀よき人あり。物を破らぬ人あり、憐み深き人あり、義につよき人あり。耻に深き人あり、是等は最上の性質なれども、道を知らねば、其よき所を育てゝ、萬事におし及ぼす事ならず、却て其よき所にあや

まられて、後悔多し。若しよき人有て、是等の人を教へ導かば、君子とも成るべし。それ忠孝は天下の達道なり。去かしながら、忠あれども、道を知らざれば、身を潔ようして、君を辱かしむる事あり、孝あれども、道を知らざれば、親の心を愁へしむる事あり。然れバ、道の尊く、教の俗わる事、知り給ふべし。されバ、人のあしき所を諫めんより、よき所を育てんにはしかじ。子を育つる事も、又さの如し。其あしき所をバ、暫く免し、其よき所を擧めて育て、よき事を教へ候はゞ、幼く直なる心ゆゑ、教に從ひ、擧めらるゝを悅び、よき所長じて、あしき所自然となくなり、終には善人となるべし。努々、折檻して、幼き氣をいたむる事なかれ。却て、ねぢれ者になり、隱して惡をなすものにて候。はじめ愛し過してわろくなし、後折檻するは、悉く親の我まゝにして、本を知らざるゆゑなり。貴殿も、よき性質あり、それをよく育てゝ、善人となり給ひ、又御子息のよき所をも、育て給ふべし。（野槐者話巻三）

古今集の歌　室鳩巣

古今集の歌は、詞すなほに餘情ありて、おほくは一唱三歎するにたへたり。

もゝ千鳥さへづる春はものごとに
　あらたまれども我ぞふりゆく

此歌を吟ずれば、老人の懐舊の情を感ずべし。

春の夜のやみはあやなし梅の花
　色こそ見えね香やはかくるゝ

此歌を吟ずれば、有徳の不可掩の誠を感ずべし。

世の中にさらぬわかれのなくもがな
　千代ともいのる人の子のため

此歌を吟ずれば、孝子の愛親の情を感ずべし。

風ふけば興津白波たつ田山
　夜半にや君がひとり行らん

此歌を吟ずれば、貞婦の思夫の情を感ずべし。

忘れては夢かとぞ思ふおもひきや
　雪ふみわけて君を見むとは

此歌を吟ずれば、君子不忘故舊の情を感ずべし。

此類、外にもなほ多かるべし。（駿臺雜話）

永見右衞門が母

新井白石

故の中納言殿（越前中納言秀康）の御家人に、永見右衞門尉と申は、中務といひ、母をば池鯉鮒殿と申て、大御所（家康）の御從弟のよし申也。されば、右衞門尉が母と共に、彼家に仕へて、後は一萬七千石の地を領す。かれが廿四歳の時、中納言殿うせ給ひしかば、冥途の御供仕らんとて、腹切て死す。其子をも右衞門とぞ申ける。此頃參河守殿（忠直）御子はしがらせ給ひしに、或人永見が母は、子すでに產て、年いまだ若かし、しかも美人の聞えあり。いかさまにもめさるべうもや候と申。やがて御館に參るべしと御使立、かの母大になげき、哀れ、我夫は、弓矢取る身のならひなれば、さむかり快か

るべき命期に参らせし。たとへ我子なくして、只ひとり住む身なりとて、いかで、再び世の人に見ゆべき。ましてかく、父が家つぐ子あり。いかにおもてなく、御館には参るべき。かゝるうき事、聞も恥し、みづから猶さまかへぬとて、やがて髪そりこぼちて、尼になる。守殿、此由聞し召、我仰に随はざらんやつには、おもひしらすべき事あり。とて、其子右衛門誅せらるべきに極る。永見が手の兵、馳集て、かの家に籠る。さらば、軍兵を差向、攻破て一人も殘らず首をはねべし。とて、いかり給ひしかば、御家人等、東西にはせ、南北にかけめぐりて、上を下へとひしめく。本多丹波守、大におどろき、斯ては唯此國の騒のみにあらず、事断闕に聞えなば、もつての外の大事なり。とて、討手の人々かたく制して、我身ひとり永見が家に行向ふ。永見が家子郎等、本多殿は能敵、此人一人を打取て、御腹召れんは、寄手何十萬騎を打給ひしよりも、猶まさるべし。と、長刀さげて出んとす。右衛門おし止め、其事ゆめ〳〵不可然、此人をたすけ出でてぞ、我罪なき由、世にも披露は有べけれ。とて、對面に及ぶ。本多何とか言たりけん。其日より、永見が家の守りもおこたりけり。年既に暮れて、翌日は元日といふ夕べになりぬれば、彼手の者共、年むかふべきいとなみに、おのが家に歸りぬ。時こそよけれ、といふ儘に、ひたと二三百騎押よせ、散々にせめ戰うて、ことごとく打取ぬ。其後三位中將殿(光長)の時に、永見が家はほろぼすべからず。とて、豊後に

て生れ給ひし御弟、二人ながら、永見と名のらせ、彼の家を繼せらる。云々。

花ふゞき

塩井雨江

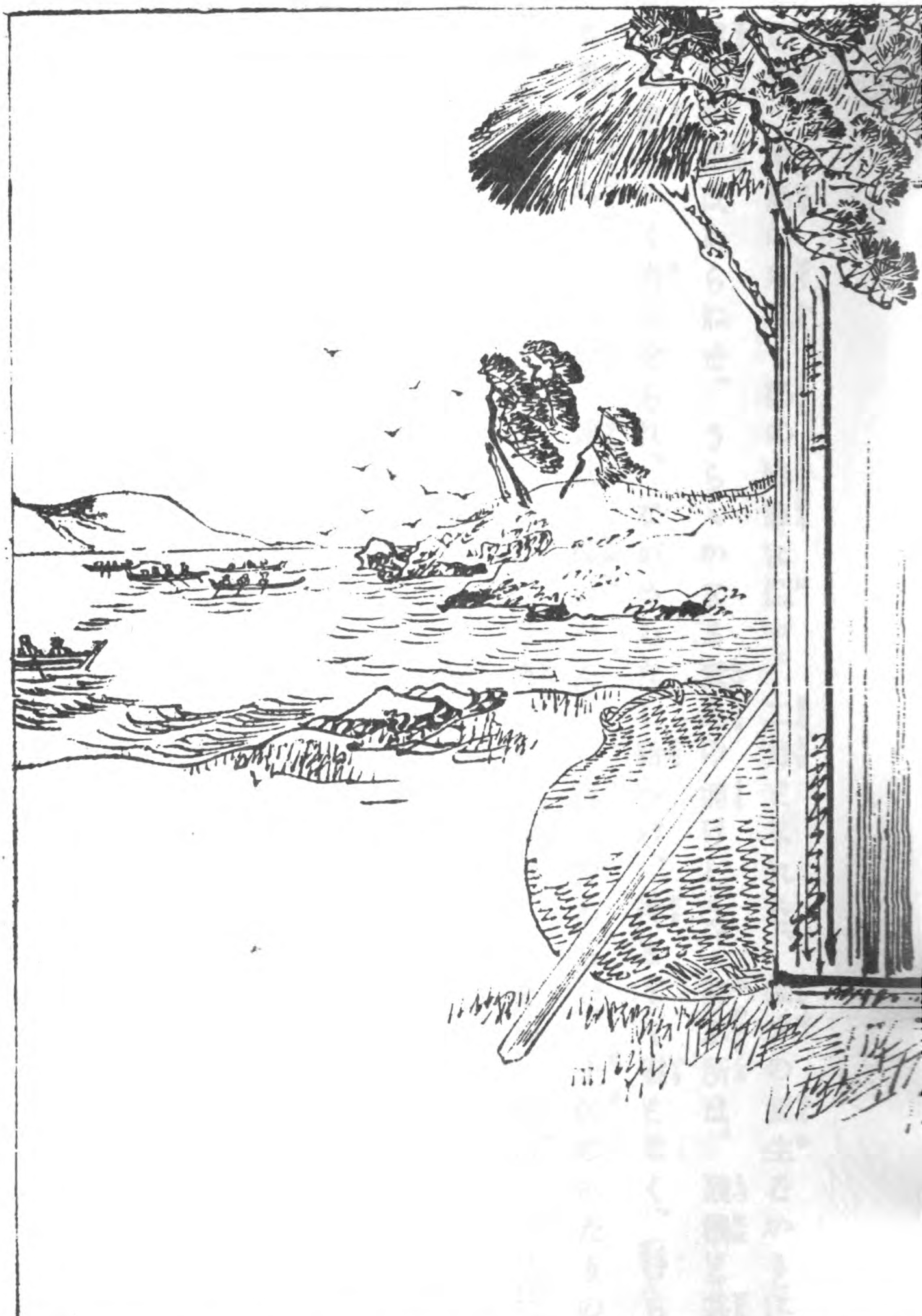
その十一

うつせみの身の一生涯、おぼつかなきは、朝暮にさらぬ觀ながら、身にしみて心細くおぼゆるは、我杖となし、我柱と頼みたる人の、むなしく病床の中に伏し沈みて、生死の淵にさまよふを見る時にあり。殊に、凄風枯木を吹き、霜露殘草を破るの日、哀猿落日に鳴き、悲厂曉月にむせぶの頃、この悲境にあはゞ、その心細さは、如何ならむ。ましてや、故山を離れて白雲遠く、鄕里を去りて流水遙かに、煙霧軒をつつみ、風浪、窓に亂るゝ孤村の客舍、我天と仰ぎ、我地とまもり、わが玉の緒と頼みつれたる人の、はかなき病床に、呻吟するにあはゞ、げに、其の心細さは、はてなからむ。悲しさは、限りなからむ。思へば、賤機が、無情の人世、無心の風雲に吹き送られ、心ならず漂泊ひたる武島の客裡に、御息所の、一方ならぬなやみに、苦

るしみ給ふに、わびたる儔年の心細さは、げにや、我影の消えゆき、わが腸の、えばみゆくにもまさりたりけむ。思ひやるだに、あはれなりけり。

名も知らぬ草は、なきにもあらねど、かむべきはどのもの、在るにあらず。舟を修むるの工はあれど、病を治する人もなきあたり。たゞ、頼むべきは、介抱の切なるのみ。そは、世に二なき、まめやかなる少女の赤心あり。又、思ひがけなき翁夫婦の情なり。盡くさむ志には、足らざる所なく、殘れる隈もなけれど、山川の心なきも、人の赤心には動くといふならひならむか。御息所のこわかりし病魔も、さすがに、力を逞うするを得ず。遂に、玉の御身を破るを得ぬうれしさや。御惱みは、やう〱輕くなりゆくに、賤機等は、立ち迷ひたる暗に、望みある光りを仰ぎ、便りなき淵に、また頼むべき峯の見らるゝ心地して、ます〱、道をつくし心を勵まして、介抱し奉れど、御息所は、いやましに、御氣色すゝみ、いつしかど、重き病床をはなれ給ひて、窓の邊りに寄らせられ、ながめたまふやうなりぬ。賤機のうれしさ、天地のわが手に落ち、三寶のわが懷に入りたるばかりの心地せつらむ。病床の夢ながらに、その年は暮れはてゝ、誰が爲めにとてか、また立ち歸へれるは、





元弘三年の春。南島の東風、都の春寒に似ず。二月となれど、彼方の彌生とかりにおぼえ、嵐山の花はあらねど、うら〳〵かなる武島の浦けしき。御息所は、賤機と共に、静よ杉の窓ちかく寄らせられ、ながめわたし給へば、沖となく嶼となく、一むらむらと立ち昇る春霞、うち靡く末は、難波わたりの津にやあらむ。土佐のあたりの島根に、やあらむ。つく〴〵と見おこせど、海原遠く、霞がくれをゆく白帆、かれは、何處のわたりを志ざすらむ。うらやましくも歸へる影、彼の舟にこそ、あらまほしけれ。賤機や、さはなきかど、見かへり給ふ。

あな、沖の方をな見給ひそ。姫上。やうなき雲や山や、徒らに、はかなきおもひをますのみにて侍るものを。こなたの磯を見させたまへや。網ひく海士の子たちの立ちどよみたるけしき、遠く霞にかくれ、近く波にまぢりなど、おもしろげには侍らずや。いつぞや歌の御宴に、内の大臣がまゐらせける洲濱。あれは、伊勢の海の阿漕浦とか申しゝが、此所の邊りをうつしつくりなば、そのありしにもまさりたるながめにこそ侍らめ。のう姫上、あれ聽給ひてか。花とはうたはねど、都とは呼ばねど、鄙びたる歌うたふが中に、世にも樂しげなるさまの、見え侍るを、見そなはせ

ときこゆれど、姫は、何ともおほせ給はず。唯、わが住みはつるべき浦にもあらバ、彼の海士の子も厭はじものと、獨言ちのやうにしたまひて、またつく〴〵とながめ暮らし給ふ夕ぐれの空、汐風も吹き亂るれバ、病後の御身によからじと、賤機は窓をおろして、なほ、とさまかくさま、慰めまつることし方ゆく末。御息所は、嬉しげに賤機をうちまもり給ひて、汝が赤心ゆゑに、ふたゝび助かるまじうおぼいたる災をも、助かりたり。もとのやうならぬとも、今はさせる痛みもあらじ。何時まで斯くて、いたづらに、老人のよしなき煩ひを、かけてのみあるべきにあらじ。今宵は翁夫婦へ物語りて、此の上の情には、土佐へゆくべきよすがを求めむとおもふにと、仰せ給へバ、賤機もかしこみて、親らも、何時かは賴まむと思ひてし事に侍る。さては、今宵しか〴〵談合仕らむなど物語る折柄、翁夫婦もありつる水士と共に、漁りより歸り來りぬ。夕べ〳〵のいとなみも濟めど、毎時のごと、爐を圍みての四方八方の物語り。賤機は、よき折りをはかり、形をあらためて、偖去年の冬かけて、多かる日數。一方ならぬお恩惠みをうけ賜はり、海にも山にも、申したぐふべき詞も候はず。げに、深

くも高くも、限りなき恩義は、よしや、とよはた雲の外になるも、八汐の灘のはてになるも、いかでか忘れ侍るべき。此の上には、何のおん情か、更に願ふべき由もおぼえ候はねど、御志にあまへ、あつかましくも、頼み奉るは、如何にもして、土佐とやらむきこゆる方へ、まゐるべき船路のたつきをたのみ參らすなり。呉れ〴〵もときこゆれバ、翁は何のをかしきにか、心輕げに、から〳〵とうち笑ひ、媼の方を見やりて、そは上臈よ、兼てより、婆とも、幾度か語りては候へど、あでなるおん身を、なまじなる事まて託らむこと、尼ヶ崎とやらむの難義の、またも覺束なし。翁が昔のやうあらむには、わが腕二本、何をか恐るべき。老いては、我ながら不甲斐なく。この頭は、網ばかりの物引くにだに、此の老さらばいたる婆を、力とするもどかしさ。いかでか、上臈のおん身を預りて、舟路をやすく行かむこと、思ひもよらず。さはとて、人を頼まむか。此の頭の人心。血統わけたる我子さへ、親を捨つるむかりの世の中。わが身の外は、所詮頼むに足らず。そのわが身は、かく老いさらむいたる無念やど、怨めしげに、腕かいなづる老の愚痴。

翁は、なほ。語をつゞけ、さはいへ、われより云ふもをかしき事ながら、おのれ夫

婦の者、かゝる孤島の岩かげに住み馴れて、世に交らぬものから、また、世の人の罪惡をも覺えず。道とやらむいふものも知らねど、不道とやら云ふ事もならはず。夫婦が心は、此のあばら家。見給ふより、外に見えざる奥もなし。隱くれたる影もなし。おん身だに、いぶせくおぼさずば、心おき給ふ宿にもあらじ。今暫時忍び給へや。いつかは、よきたつきも候はむ。よきたつきのあらば必ず屆けまゐらせむ。のう婆、さにはなきやと、詞も姿も粧はざる翁の一言、心の底も見えてうれしや。媼も力なげに、賤機の方をうちまもり、わが夫の申し奉る通り、しかしたまへ。惡しかれとは思はぬ夫婦、心のどかに、よき折りを待ち給へ。思へば如何なるえにしにかあらむ。思ひがけなきあるじし奉りてより、何となうなつかしさの、月日と共に積る心地して、いまははや、片時も離れがたく覺え奉る上臈。なまじ送りまゐらせむとて、よしなき災禍起らば、いかなかりかいとはしからむと思ふに、いとゞいなし難し。屆けて、われ等の心に從ひ給へ。おことは幾歳にか成らせ給ふ。わが娘の一人ありけるが、存命へてあらば、おん身とおなじさかりにやあらむとおもふに、いとゞなつかし。此の春は三年の忌になり侍る。優しかりけるが、殊更に心殘り

の種に候、今一人男子の候ひけれど、女子には似ず、心こわき者に候て、父母の心に逆ひ、家出せしまゝ、便りせずといへバ、翁は俄に見かへりて、あなやうなきもの、再び聞くも穢がらはし。やうなき事ないひそ。のう上臈衆、京にては宮方と將軍方との戰ありとか。宮方は如何にかゑつる。知りてならバ、きかまほし。上臈衆を、かゝる邊りに見奉るに、何となう心元なくおぼゆる宮方の事。われ今は、かく世を離れたるも、ゆゑよしなきにも候はず。きかせ給へと、語り出る物語り。又如何なる話しかあるらむ。

一本萩

柴田千稻

その三　月の影

西も東も辨へ難き幼き時より、母の惠の露に漏れて、只父の懐をこよなき賴の蔭と懐き、朝も夕も父をのみ呼びて離れ離きものに思ひしが、年月積むにつれ我にも母といふものゝいましけるを知り、蝶よ花よと愛らるゝ身も母の見えたまはぬこと常

に心にかゝり、餘りの懷しさに、父上よ我身の母樣は何處にと、御膝に纏はりて尋ねまつりし時、流石に猛き父上も堪へ給はざりしと見え、淚を浮べて我身を搔抱き給ひ、御身の慕ふ母は彼處にと、指ざし給ひしは袋棚、訝しさに御膝を滑りおりて其戸を開けば、三ッ四ッばかり位牌の並び居たり。扨は此世にましまさぬかと、何をも覺えず身慄せられて堰き止め兼たる淚は瀧をなし、今始めて別れまつりしが如き心地したりき。これより御懷しさ一層身にしみ、夢にも幻にも母上の御面影のみ忍び出られて、衣の袖に淚の露宿らぬ時ぞなかりし。

かくて後、此大奥に仕へ奉る身となり、多くの方々に立混れど、母上の後見なき身は何となう心細く、事々につけ蹴歷るゝ心地して、辛く悲しく、胸のみ結ぼれて物憂き日をやう〳〵に明暮しけるが、御臺所は我身を不愍とや思召したりけん、雪の朝雨の夜、徒然の御伽には必らず我を召し給ふに、いと嬉しく忝なく、賴少き身には一滴の露さへこたふるものを、況して優しき御言葉の數々は如何で忘れまつるべき。事々忠實に仕へまつるにつれ愈二なきものに思はして、御心の内さへ語り明し給ひて、愚なる此身を杖と倚らせ給ふ勿體なさ。あはれ如何で何時の世忘れまつる

べき、此万斗の御恩に報いまつらん爲に此身を捧げて後の世迄も御側離れじと思ひこそすれ。

今日は強て相撲の技をと勸めまつりし甲斐ありて、歸らせられてよりも何時になく御氣配の爽かに、余念なき御物語に時を移させ給ひて、時々御心能氣に微笑せ給ふを見まつれバ、我も自ら春風の音信に逢ひたるが如く覺え、思はず夜を更して漸く今下りまつりしが、思ひ廻せバ御痛はしの御心の中、結ばれ給ふはさることながら、そを晴らしまつるべき術のなき事か、とやせんかくやとは日毎夜毎に思煩へど、愚なる女の身の徒らに胸を痛むるのみにて、せめて打出でゝ語るべき人にてもあらバ、又せんやうもあるならんにと、燈火の元につくづくと物思ふ松島の局、おくれ毛頬に落ちて花の顔露重げなり。

漸くに思返して立上り、閉したる蔀戸を押開けバ、天も地も全く睡眠の中に沈み、萬籟寂然として聲なく、膚寒き春風折々窓を襲ひて、燈火の影は眠氣に瞬けり。

局は物憂き額を抑へて悲しげに溜息を漏らし、見るともなく庭の方を打見やれバ、靉靆たる烟霞の中に朦朧たる一輪の春月、群り重なる花の梢に懸り、花や笑つて月の

面を撫するか、月を親みて花の色を洗ふか、妬氣に覺えてそよ〳〵と吹き來りたる春風は、其間を掠めて橫さまに走れど、身慄して落來る二瓣三瓣、あはれ蝴蝶の夢に浮れて翩々たり。

悄然としてそを見惚れたる局は、堪へ兼ねけん、其廊の邊に立出で、やをら下りたちて櫻の木の元に立寄れば、落英は意あるものゝ如く其雲鬢に宿り、月は其花の雲の絕間を別けて、窺ふが如くに薄き光を其の顏に留めつ。

暫し此處に立留まり、古の歌などを細かに口の中に誦じて、何氣なく彼方を顧れば、怪し。怪し。此眞夜中、誰も鎭りてうまいする頃、確に人の影の逍遙ふを認めぬ。扨も狐狸の業か變化の所爲か、局は思はず冷かなる水を浴びせられたるが如く感せしが、流石に逃げ隱れもせず、尙つら〳〵打護れど、其人影は動き出して此方へ寄り來るが如く、微に音なふ足音も靜りたる四邊には耳だちて聞ゆ。

局は其木の元に身を縮めて蹲踞り、其人影に目を放たず打見遣れば、やがて四邊に心を配りて愈近寄り來りぬ。近寄りて局が潛みたる櫻の木の橫手なる松の木蔭に入りぬ。見送りたり局は再び驚けり。心の內は怪しやと恐しさとに攪亂れたり。彼の

人は房かなる髮の毛を背に垂れて、色はわかねど何をか摺りたる衣を纏ひ、ゆらりゆらりと身も重氣に歩む女房の樣なり。尙それのみならず、其後に、丈高く肩怒り肱張りたる男の、直垂を纏ひて長き太刀を横へたるが續きたり。

局は玆に始て氣付きぬ。花に浮れ月にあこがるゝ心の迷出でて、初こそ木下がくれ流るゝ水の、それぞとも忍びしを、海人の焚く火の夜は炎えて、絶ぬ思の筆の跡こそかゝる樣となりしならめ。扨もよしなき所に來合せてけり。如何はせんと今更に心を痛めて躊躇ふ内、ソト聞えしは松島局と語る男の聲、思はず耳を傾くれバ、女はホゝと袖を口に覆ひて忍笑せしが、堪へ兼ねたりけん思はず高く漏すに、男は慌てゝ叱と制し、其後暫し話の途切れて又も男の云ふ、「其方を大奥へ入れたるも只宮仕すといふのみにあらず、否、宮仕とは表向、誠は心を留めて隱れたる事柄を探り………今宵猫冠者の確に罷り出たると聞きしが、其方は放心として見逃したりとは、扨々世話のやけたる事哉。彼の小冠者め、一家の爲のみにあらで我一人の怨も重々、今宵待伏せ………ハゝゝゝ否孰れはこれの錆よ。と佩きたる太刀を叩く音聞ゆ。女は如何にしたりけん言葉なし、暫し經て勢なく、ろはあまりに無道………「何、無

道とや、何が無道……………さてはこそ手緩しと感せしも理、哀れや嵯峨野の篠薄、秋風に心の奥をも亂されたるな。と男の語氣少し荒し。『無道なりともよく亂されたりともよけれど、御身は如何に、松島の磯に寄る〳〵波の飛沫にぬれんと思すは如何に、人のよしあしは兎に角に、己が身はうしろめたくも侍らずや、こゝ四郎殿』『其の事其の事、其の事は幾重にも頼入る、大男一人土に手をつきて拜みまゐらするは、ぬかりは有るまじけれど、ぬかり無き上に尚一段とぬかりなく』『ホヽヽ流石の鬼殿も姫松の露にかけては骨のなきが笑止、尖りし角を折り給ひし御痛はしさに、及ばずながら御力添を爲すべけれバ、これ鬼殿、代りといはゞ可笑しけれど、あまり無道の事はなさるまじきぞ。返す御言葉が御座らぬか。ホヽヽと、少しく嘲るが如く嬲るが如き女の言葉、これは普通の戀にはあらざりけり。

文林

朝鶯

このごろは垣の竹をねぐらにて
朝とく來なくうぐひすのこゑ
近衛忠熙

今日もまた朝いの夢をさましけり
窓ちかく鳴くうぐひすのこゑ
東久世通禧

朝日かげのどかにゝほふ梅が枝に
聲さわやかにうぐひすの鳴く
鍋島直大

わが宿の梅さきしより朝なあさな
鳴くうぐひすに目を覺しつゝ
長岡護美

うぐひすの聲のどかにも聞えけり
朝かぜかをるうめのはやしに
水野忠敬

あさ鏡とる手ゆるみてうぐひすの
聲にこゝろをうつしけるかな
前田利昭

我がものと思はるゝまで朝ごとに
來てなく庭のうぐひすのこゑ
宮地嚴夫

長閑なる今日の一日のあらましも
にほふあしたのうぐひすの聲
小出粲

坂　正臣

鶯はおさなおさな來て鳴くらめど
聞かぬ日もあり春のねぶりに

植松　有經

松の戸のおくれバ鳴きて花見にと
いづるもをしきうぐひすの聲

大口　鯛二

日たくれど大かたよそに移りけり
わか山かげのうぐひすのこゑ

千葉　胤明

朝日さす窓にてきけどことさらに
のどけかりけりうぐひすの聲

梅風　三輪　義方

月きよき夜はのあらしに薫れども
梅のありかは知られざりけり

野外柳　石丸　忠胤

少女子が若菜つみつゝかへるさの
かすむすゑ野になびくあを柳

名所霞　高田　顯允

隅田河いま戸のけぶり添ひぬらむ
駒がたかけて打ちかすみつゝ

梅梢春月　松岡　調

梅が香のかをりにけるかはつ瀬山
はつかに見ゆる春の夜のつき

汽車　酒井　喜雄

黒けぶりたてゝくるまも進む世に
おくれじとおもふ心ともかな

安積山　菊地　眞澄

あさか山とほきむかしのおも影も
うつりやすらむ山の井のみづ

辨内侍　佐々　豊水

つき草のかりのちぎりは結ばずて
松のみさををまもりつるかな

朝鶯　鍋島　榮子

吹く風の寒さわしたもおこたらず
鳴くうぐひすの聲ぞきこゆる

蜂須賀隨子

わたゝかに寝たるなごりの枕べに
朝戸あけよとうぐひすの鳴く

松平　健子

打ちかすむかげおぼろなる朝月夜
しらむ軒端にうぐひすの鳴く

小笠原艶子

窓ちかく鳴くうぐひすの聲きゝて
今朝も閨をいでゝけるかな

古柳　小池　道子

我がかどのつゝゐのもとのふる柳
くちても春をわすれざりけり

春澤　高崎　竹子

長閑にて風のふくとも見えなくに
野澤のみづにさゞなみの立つ

旅宿梅　諏訪　晴子

旅ごろもひと夜かりねの宿なれど
梅さくころはながゐしてけり

歸雁　三輪田眞佐子

小簾まきて眺むる程もとゞまらず

雲路はるかにかへるかりがね

海邊霞　安東　菊子

和田の原空もひとつにたな引きて
たちへだてぬる春がすみかな

野鶯　園生　鶴子

つバなぬくみやこ少女がふり袖の
引はへて鳴く野べのうぐひす

病のとこにありてよめる歌并に短歌　松本　道別

草まくら旅ゐのそらに　草つゝみ病に臥せむ
益荒雄とおもへる吾も　村肝のこゝろをいたみ
かゝる時なつかし者は　ちゝのみの父のみことと
はゝそはの母のみことと　戀ひしきは我妹子らと
あしたには空打ながめ　ゆふべには枕によりて
ぬえ子鳥裏泣きまねぶ　あはれこのごろ

ちゝのみの父懐かしやはゝそはの
母戀ひしやと思ふころかな

雪のふりける夜唐國に赴きたる軍人を思ひやりてよめる歌　海上　壽子

現津神吾天皇　御軍を出し給へバ
千萬の益荒猛雄は　荒鷲のいかれるごとく
いやせめに攻め戰へむ　小鳥なすさひづる奴
唐人はおびゑわなゝき　ちり／＼ま逃ていに鳧
そが仇のこもりし大城　そが砦の築ひし塞
かも角もうしはきまして　ひらきもの心ゆるべず
そこをしも守りしをれバ　風まぜに雪はふりつゝ
彌さらにさゆる此夜を　荒栲の衾かつがず
敷栲の枕もまかず　ひた土にまろ寝をまつ…

故郷のめぐき妻子を　いめにや見るらむ

鶯溪の梅を思ふ

横井知萬多

某の地より一里ばかりにして、鶯溪といふ處あり。梅をもて名あり。道の序に、其方へと志す。半里ばかりゆきて見れば、山、あるは高く、あるは低く、波の如くなるに、雪、いと白くつもれり。彼處はいづこぞ、と問へば、鶯溪なり、と答ふ。さては、まだ雪ふかきにか、とあやぶみつゝゆきゆきて、大かた、其山に近くなりたるに、峯よりおろす風は、何となく馨し。さては、鶯溪なるか、と仰げば、彼の雪と見しは、梅の花の盛に咲るなりけり。急ぎゆけば、川、あるは深く、あるは浅く、蛛手の如くなるに、花、波の上にも打笑めり。あるは仰ぎ、あるは俯して、興頗りなるに、黄鳥はなきて、こゝにと呼ぶやうなれば、そこへと志してゆけば、又かしこにありて呼ぶ。又そこにゆけば、なほ彼方に呼ぶか如し。其なきて呼ぶ處、皆梅の花ならざるなし。友もがな、かゝる處を一人して見ることそ口をしけれ、と思ふほどに亭あり。少時休らはん、と音なへば、主人いでたり。見れば、はやう老れる人なりけり。こはゆくりなし、めづらし、櫻ならでも、年にまれなる人もまちけり。いざ〳〵、といふに、おのれも、ゆくりなし、めづらし、とて立ち入りぬ。まづ、何よりも、こゝの山のたゝずまひ、川の流、世になき斗なるに、かく梅さへ匂へることよ、といへば、ぬしは、ま

だ、こゝの勝れたるを知らざるか、といふ。あは
れ、鳥さへ啼きつれて、花の千代をうたふこと
よ、といへど、ぬしは、こゝの名をしらぬか、と
いふ。誠しらざりき。此處の名は聞きつれど、こ
の花、この鳥、かゝる色音の集りたらむとは。ま
して、ぬしがこゝにをらむとは、といへば、おの
れは、この地のめでたきに、遂に移り來ぬ、とい
ふ。そはともあれ、よくこそ來給ひつれ、と喜ぶひ
まに、酒などいだして、あるじするに、いたく醉
ひしれて、打ねぶりけり。眼さむれど、月は、は
やう東の山の端をいでゝ、其光、みな匂ふが如く、
めづらしさ又ことなり、友とともに、山にのぼり、
枝を手折りてもてど、香、自ら、衣にみち、川に
下りて、水を結べど、月、自ら、手にあり。あは
れ、おのれはなどとくこゝに來ざりけむ、と口を
しがれば、おのれも、心しれらむ友をまつこと久
しかりきと、友は笑ふ。さるにても、かゝる夜頃
に、なかぬ鶯こそうらみなれ、など怨ずれば、め
づらしう聲のきこゆるは夢か。夢にあらず。あり
しことは、七年ばかり昔、まだ故里にありしをり
の夢にして、夢とおもひし鶯の聲のみは、まこと
なりけり。戸の隙間もる旭日のかげに驚きて、立
ち出で、その聲をと、戸さとおし開けたど、ありし
聲は、いづちいにけむ。軒端の梅は、はやうはゝ
ゑみそめたるに、わが庭ながら、いとめづらしく
て、旭日ににほふ鶯溪やいかならむ、と其木下を
立ちもえ去らずてなむ。

女子の學びよつきて

鹽井ふく子

むかしの人は、をな子の、あまりに、ざえあるを、よからぬものに、いひなして、大方は、糸竹のふしなどをのみ、むねとあはれならんやう、こゝろざし、文の學びといへど、僅に敷島の道のみ。それだに、たど〱しくて、はか〲しきは、なかりけるとか。さるべく思ふ人は、あさましき例などひきて、むかし内大臣道隆の北の方なりける高の内侍とやらんきこえけるは、あまりにざえかしこくてありけるほどに、後にはいと墮落れられしとかいひ、あるは、さる女子の、いときはめたる漢學者なりけるが、あまりに、ほこりがなりけれど、或男の、これをど、いひこめんものとおもひて、或日、其家におとづれたるに、女子は、早くも男の心をしりてにや。其人を見るより、易にも見え侍りぬ。御身のけふおはしたるは、こゝに、我をど、なじらんとおぼす事ありてならん。されど、まづ我方より試み申さん。大學には、子曰くが、幾つ程ありてにやと、あなづる如くに、いひたりければ、男、ものもおぼえずなり、口をもえひらかで歸りぬ。後に、其女、くるひ出てうせたりとか。誠にあさましきことよ。さる事のあるからに、女子の學あるは、身の上のため、よからずなど、いといとあさましきあやまりをいふ人のあるなめり。われ思ふに、女子は、いとむねせまく、心小なる故に、一卷二卷ばかりの書を、よくもくだかで、口によむ事すれバ、はや〱、心に胸に、あ

まりひろごりて、もはや、何の數も、くれの文字も、え入らずしてやむからに、あさはかなる考へ、奥ゆかしからぬ振舞、するものとやなるらん。故に、女子は、其道をきはめんとおもはゞ、先づおのが胸をひろやかに、おのが心を大きやかにもち、いよいよ多く、いよ〳〵深くならむやう、心かけたらんには、道をたづね、物まなぶことの、女子とて、あしき事かは。さなくて、あさ澤沼の、あさきを見れど、はや大海原の、ふかさをも探りたらむやう思ひおごり、庭なる島にのぼりては、既に大岳をも、ふみつくしたらんやう、心はこりのするものから、人にもあしきものにいはれ、くちをしき事になるらむ。あなかしこ。かくいふも、また、おなじためしに人のいふらむか。

雜報

●諸孃の用意は花見の上のみにもあらじ　鶯の聲調ひて、春やうやう温かうなり、朝いの夢濃の時節となりぬ。唐人の所謂、春眠不覺暁とは、今をこそいふなれ。つれ〳〵とふりくらす春雨に、梅の花を散らすは、惜しからぬにはあらねど、櫻花の咲くをいそがすと思へど、こも、また、あながち憎くきにもあらず。かにかくに、長閑に樂しき季は來りぬ。あはれこの時、諸孃が上は、春期試驗の

また調に、あわたゞしきもあらむ。また、養花の空につれて、心浮きたち、花見の用意とりどりなるもあるべし。試驗のまた調にあわたゞしきは、いふまでもなくよし。花見の用意に心浮きたつも、若き諸姫には、また、まひて咎むべきならず。ただ、顧て、戰地の軍人たちは、まだ雪深く、朔風寒きうちに、苦戰しつゝあるは思ひ給はゞ、諸姫の用意は、花見の上のみにもあらじかし。

●一賤婦の志よく全村二百四十餘人を動かす

天さかる鄙の國ほど、心素直にて、義にいさむ事強きは、誠に、都人のうら恥かしきばかりなり。島根縣神門郡出岐村の事と聞く。同村の宮廻何某といふ人、去年の十二月中旬頃、所用ありて、同じ里なる山本何某が宿を音なひ、何くれと談しくらして、夜も、はや更けぬれど、暇告げて歸らんとするに主人の妻、かゝる深夜にもかゝはらず、機具の上にありて、孜々として、木綿を織りてあれど、何に、かく深夜まで織り給ふやと問ふに、妻は、いとも熱心の顏色にて答ふるやう、妾、曩の夜、學校の幻燈會に、征清軍の人々達が、雨風あるは、霜雪の中に敵とたゝかひて、艱難辛苦の數々を盡し給ふよしを見聞きて、妾ら如き、賤き愚の身にも、感激に堪へず。因りて、何がな心ばかりなりとも、軍人だちを慰勞の品もがなと、さまざま工夫すれども、貧家の悲しさには、思ふに任せず。せめて、家業の暇に、木綿を織りて獻納せむとて、夫にも語らひ、斯くは、夜毎おそくまで織り侍ると語りければ、宮廻も大に感じ、かゝ

る貧家の妻さへも、猶此の志あり。我等男子が、何とて、國の大事を仇に見過すべきとて、それより、村内の有志者をかけ廻り、此事を語りて、何がな、吾らも應分の献納せむといひしに、何れも、山本の妻が志に感じ、一同協議の上、迎年の費用を節して、同様に、木綿を献納する事に決し、二百四十三人して、木綿五百反餘を、赤十字社恤兵部に献納したり。至誠の感ずる所は、天地を動かす。賤しき貧家の妻が志、よく全村二百四十餘人を感動せしめたり。世の貴媛貴婦人と稱せらるゝ人々も、なべて斯くありたくこそ。

●揖取男爵講話筆記　女子高等師範學校より送り越されたれば、左に掲げて、媛達に紹介しまゐらせん。

女子高等師範學校に於いて

男爵　揖取素彦君　講話

私は、今日は初めて皆さんに御目に懸りますが、揖取と申す者で御座ります、是より前、秋月校長、篠田主事の御依頼がありて、私に何か御話を申す様にと云ふ所の御案内も御座りましたが、私は、口上取り廻はし不辨なもので、御話の上にも、チツト手爾遠波が御聞惡い事があるかも存じません、併ながら、私は前年より皆さん方の御教育の事に付きては、聊か心づかひを致した事も御座りまして、御其方々に付きてはどうか其道に篤志な御方々、御相談も申上げ、私の考をも御質し申したいと云ふ考も持つて居りましたけれ共、兎角は世の中の事に追はれ

まして、其事も果しませず、徒に、今日まで其儘にして居りましたが、今日は幸ひに當席へ出まして、皆樣の爲に御話を申やうのことで、私に取りては誠に滿足に存じます、併し私の御話を申したいと申すことは、皆さんとくに御承知もあることで、格別耳新しき所のことを御話申上げることも出來ませず、只今御話致さうと思ふことは、御承知の前のことであらうとは存じまするけれども、先づ私は、私の前年より、是なら皆々さんに少しは御爲にもなるであらうかと心得居りました所丈けを御話致しまするから、この愚かなる所の話も、どうぞ、其積りで御聽き下されば、此上も無いことで御座ります。

さて、當校は、即ち我が帝國全般の婦人方を御育て申す、その種子を拵へるところで、是は唯今農學の方でありますと、育種場などといふ事もありまして、是は御承知も御座りませうか、皆さん即ち御婦人方の師範となつて、其教育をなさる所の種子を御育て申すところでありまするから、此處に入つしやる所の御方は、其引受けらるゝ御銘々の責と云ひ、任と云ひ、自分自分の御仕事はなか〳〵大きい、手重いことで御座りまする。そこで皆さんには、各地方より遙遙と、親御や、又、御兄弟、御親類などの手元膝下を御離れなさつて、此東京へ出でられ、長い月日の學期を仕遂げやうといふ御考は實に感服で御座りまする、なか〳〵前日の婦人方には斯樣なことは迚も望める譯でも無いことゝ存じ

ゆするが、今日は皆さんの御心掛のところが發達を致し、その御進歩もいちじるしきところは、實に前日と相違したことである、さて今日から既往のことを思ひ合せて見まするに、益々私共感ずる所の深いのでありまするから、先づ試みに是からは、此處の學課を御終へなされました以上、未來のところの事を、私の考を以て仕分けて御話致したいと思ひまするが、先づその仕分けには御聽き易い樣に段を附けまして、婦人方上流の話と、其次にわたる談と、二仕切り程に致しまして、御話申したいと考へて居りまする、其二仕切りと申しまするのは、今日學問をなさつて、此學問が成就致したところにては、格別等級のわり樣も御座りませぬけれ共、

自然と皆さんの他日の業には、其廻り合せといふものがありまして、廻り合せに御出會なさつた御方はどうも致方が無い、先づ其廻り合せの方のことに付きまして、一番始めの所から御話申上げまするが、先づ前日のところでありましては、婦人方の一番上流を占めてゐらるゝ者は、私は官女と存じます、官女と申すは、みな御承知でも御座りませう、宮中に入り陛下の御側に御奉仕を致しまして、朝夕を送る人のことで、その方々の服裝、支度から總ての起居、振舞、言語等に至るまで、別段で御座ります、即ち唯今の女の洋服などの行はれませぬ前は、袿、緋袴の如き夫れ〳〵の服裝は、幾程もありますれ共、概して申せど、如何にも優美な誠に上品

なもので御座ります、即ち 陛下の御身近う御給仕を致しまするも、 皇后陛下 皇太后陛下みな御同樣で其勤を致しまする所の人は婦人にして位階をも賜はります、即ち無上の仕合の宜いことで、側から見れバ、羨しいと申す位なことで御座ります、併し前日で、是等の位地に進まうといふことは、一般の婦人方では出來ませぬ事で御座りまして、それは何故かと申すと、總て、禁裡御所から宮中一般のことを指して雲上と稱へ奉るので、そこに奉仕する所の男子の人は、雲上人と云ひ、女儀の人でも其邊に奉仕するものは、雲上〳〵と申します、雲上とは即ち雲の上で、餘程上下の程度が懸隔りまして、如何わせりましても、そこへは追附けないといふ譯で、雲上といふ名もあつたものと見へます、婦人方で御座りましても、同じ婦人と生れられて、一は雲上と云ふところの結構な位地へ這入れる人があり、一は這入れない人がある、誠に不可思議の樣な事で御座りまするけれ共、是は自然時の勢ひの有樣が、斯なつて居るので、如何致しても是はいたし方かないであります、今日となりまするといふと、其懸隔りましたるところの事が、サット皆解けまして、前日は羨しく思ひ居りましたる所の位地にも、婦人方、其人の才智が發達も致し、力量が備はりまする日には、何時も諏ち前日の雲上と云ふて、誠に高くて、及むれぬと、見上げて居つたところへは、這入り込まれる時節になりました、して見ます

れバ、皆さんも此學期を御終へなさつて、美事なる卒業の成蹟のある以上は、何時も其位地へ還入れますものであります、故に其位地へ還入る樣になりました節は、何も差支ない樣に御考が、即ち今日こゝの御修業中に無くては濟むまいと考へます、夫れで、上も下もみな才智の發達を以て人を御採りなされることになりました、何時も何の局とか、何の典侍とか、いふところに御進みなさる人になられる事は、誠に難有い事だと思ひまする、何とぞ皆さんも、他日其位地に御還入りなされましても、何も差支ないやうに、私は希望いたします、又この婦人方の宮中に還入ります事は、スツト古いところには釆女と云ふ御制度もありまして、各地方から婦人方を選び、唯今の徵兵を見たやうな譯に取揚げて、宮中へ差出すことも御座りました、けれ共、是は昔のことで、中頃はさういふことも、サツパリ無い樣になり、誠にそこが、筋め身分のある婦人方に極り切りました、故にかの御奉仕をするものは、雲上人と申す位に、事が狹くなりましたのであります、何故かの婦人方の上流に立つ區域が狹うなりましたかと申しますると其狹い譯は、禁裡御所、即ち宮中へ御奉仕をする人は、唯々百軒か、そこらの公卿とか、堂上とか、いふものゝ外は、一向出られぬことになつて、其家に產れられた女性の人でなければ、上流の位地へは、進まれぬことになつて居りました、故に大名など、身分は充分あります

る人でも、矢張り堂上など筋目のもの、外は、其位地へ選入られませぬから、益々婦人方の上流の位地を占めるところの場處が、狭いことになります、今日は實に、そこになりましては、前日の様な窮屈な法は解けましてからに、皆さんの學期卒業の上は、いづれへでも立たれる道が開らけたのでありますから、その御志を以て上流の所へ立たれましても、一向差間が無いと、いふ所の御心掛がなくてはならぬことであります、其廉々にわたり、御話申せど、尚御話もありまするけれ共、是は今日申述る必要も御座りませぬ、且又追々には夫れ等のことも御研究なさるであらうと存じまするから。私が、其御話をすることは先づ控へて居ります。

さて、唯今の御話申上げましたところは、皆様の上流へ御立ちなされる様にと、いふことの希望を、私は演べたつもりで御座ります、其次に至りましては、學問と申しまするものは、大きく用られは、大きな働きを致し、又少さく用られば小さき働きをするといふが如く、總て學問の致方は、活用せぬとその益がありません、私はどうぞ、學問の活用のある様にといふことを兼ねて希望するので御座ります、此學問に、活用が御座りませぬと、幾ら書物が達者に讀めても、文章が能く出來ても、亦字が能く書けましても、夫れは、夫れ迄のことで、矢張り、テーブル上の仕事の外は出來ない様なもの、テーブル上の仕事の外出來ないことになりますると、

日用の益にはなりませぬ、どうぞ、學問は社會の用に立ち、テーブル上の仕事を離れまして、夫れがいづれにても、充分の働きがある樣にあり度事と存じます、又、當校の事に付て申しますれど、是はみな高等科の教育を御受けなさる塲所でありまするから、即ちこゝの學期を御仕舞になり他日は自分〳〵の生國へ引取られる方も御座りませう、又、他の地方より招待に御逢ひなすつて學校の御師匠さんに御成りなさる人も御座りませう、又然るべきところの大家とか名家とかいふ大きいうちへ御片附きになりましてから、其大きい所の家でありますれど、必ず内輪の仕事も多くて、御世話も多く、即ちその良人を御助けおされて、互に家事向を始め、主人たる人のする仕事をば、内に居られ、手傳ひをして、りつぱに、家政を助けらるゝ身分にお成りなさる方もありませう、又婦人方の家政の事に關はられましてから、始終主人を助けて万端の事に心配があることは、實に結構な事で、即ち之れ内助と申します、内助と云うて、内の手傳が能くゆき届くので、主人たるものは、外の仕事にぬけ目がない樣に、總て亭主の手の届きませぬところを手傳つて遣はしまする、是が誠に内助と云うて、必ず婦人方の身の上には必要あことで御座ります、又婦人を引うける先方に於ても、内助となるべき人をば、見立てまして引受けるのが尤も必要でありますに依つて、私共希望致しまするのは、この所で、御修業

になる方〻は、いづれも、内助のことにも差閊なく、みな卒業の曉には立派に其御働きの出來る方〻が、未來は必ず出來るであらうと考へて居ります、さすれバ、内助といふものに就きまして、立派にその手際の見へまするも、即ち當學校の成蹟であると斷定いたします(未完)

●年廼舍の歌會

年廼舍發會

當座競點題

里梅

重嶺地
弘訓地

春風のふきそめしよりうくひすの
初音のさとにうめか香そする　宮木滿勢子

重嶺人
弘訓天

春雨のおともえつけきあかつきの
ねさめのさとににほふ梅か香　鈴木重信

重嶺天

みる人のゆきかふ袖にかをるなり
すき田のさとの梅のおひかせ　大河内一子

弘訓人

世をそむくみのわの里も春なれや
うめさきてより人のとひくる　増山三雪子

子をおひてうたふ里女のたみ聲に
にけなき梅のはなのいろかな　井上正直

里ちかきかきねにさける梅のはな
にほひを袖にとめてかへらん　前田利聲

昨日けふのとかになりて咲にけり
ねさしの里のうめのはつはな　水野忠敬

薫りくる風のまに〳〵とひくれは
はやこのさとの梅さきにけり　増山正治

梅の花さきのさかりになりしより
ゆきゝにゝほふかつしかの里　鈴木重嶺

鈴木　弘恭

花のさくをりのみ人のとひくれは
うめのしめたる里といはまし

佐々木古信

梅もはやさかりなるらん大そらも
にほひにかすむつきの瀬の里

佐々木信綱

梅さかぬやとこそなけれ風かをる
ねきしのさとをとめてきつれは

青木　修

はる風のふくかまに／＼梅のはな
香もなつかしきふかくさの里

櫻井　尙保

わらはへか手折て香をやもらしけん
かたさとの名も梅にかくはし

千野　千艸

春くれは千本のうめのはころひて
花につゝきのさとゝなりけり

花野美左子

石ふみのたてるをみてもこの頃の
ものとしもなきさとのうめ園

河合喜左子

うらちかく霞のあみをもりくるは
すき田のさとのうめのはる風

後藤　兼子

ふく風の薫るまに／＼とめくれは
うめさかりなり小向井のさと

飯田　稻子

あし垣もま垣もともにかをるなり
うめのさかりはすみよしの里

諏訪　晴子

うら／＼とふくはる風に梅が枝の
花のかをりもふかくさのさと

諏訪　忠誠

ふく風ににほひはもれて夕かすみ
小くらのさとの梅のさかりは

諏訪　忠元

追加

うくひすのさそはさりせは此里の
梅のさかりをしらさらましを

教の庭

二月二十日兼題　歸雁

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　長野縣東筑摩郡塩尻村　河野文子

花の香をつばさにしめて雁がねの
　かへる旅路やのどけかるらん

地　東京本郷區淺香町　落合操子

故郷のはるやいかにとながむれば
　ゆふべのそらに雁かへるなり

人　埼玉縣下浦和町　大橋てい子

夕がすみたちへだてずは雁がねの
　行へのかぎり見おくらましを

人　三河國寶飯郡下地町　永井さい子

見おくれば早もかすみにかき消て
　とほざかりゆくおまつ雁がね

山ざくら月もにほへるこのゆふべ
　なにをうしとて雁かへるらん　安井章子

見わたせばのどかに晴るゝ高砂の
　をのへはるかにかへる雁がね　安井龜子

わかずみる花のにほひも深き世に
　さらずがほにてかへる雁がね　住山幾子

薄すみのかすみをわけて行く雁は
　たびのそらにや春はすぐらむ　平野きみ子

なく音のみほのかにもれて天の原
　かすみがくれにかへる雁がね　松尾勉子

定めなき世にはならはで春くれば
　をりもわすれずかへる雁がね　芳野雪子

歸るさにつけよ雁がねたらちねに
　われつゝがなく文はまなぶと　蜜野萩子

心なき鳥とはおもへどさきにほふ　佐々有鄰子
はなをみすてゝかへる雁がね

まてしばしかすめる月に歸へる雁　碓井　信子
今宵ながらも有べきものを

雁がねは秋とちぎりをむすぶらん　碓井　武子
くる春ごとに立つをいそげむ

春の夜のしらむもまたでかへる雁　碓井和可子
おのがとこよを思ひたつらん

今はとてかすみを分けて行く雁は　磯部つや子
はな咲く春をよそに見るらん

たちて行くはるの雁がね故郷に　羽田千世子
かすみのころも着つゝ行くらん

立ちかくすかすみわけつゝ行く厂は　羽田三緒子
くもゐはるかに聲ぞきこゆる

きのふまで都のはるをかりがねも　松本しづ子
今日はこし路に急ぎゆくらん

咲きにほふ花を見すてゝゆく厂は　木下　鈴子
ゆきふる里やこひしかるらん

秋たゝは霧たつそらにまたや見ん　木下　本子

いまはとかへるはるの厂がね

花ふゞきこゝろを花にかすませて　日下とく子
うしろやすきかかへる厂がね

月きよき空にうかれてかりがねは　新開みちを
かへれどわれは淋しかりけり

花も咲きつきもおぼろに霞む夜を　淺井　國子
よそになしてもかへる厂がね

遠近のそらをやかりのかへるらん　太田　定子
かすみかすまぬ聲のきこゆる

咲く花にこゝろうつさで春もなほ　吉田　芳子
ゆきのふるすにかへる厂がね

百鳥のふりはへてとふはなの色を　梶井　久子
ひとり見すてゝかへる雁がね

あだにちる花をうしとや思ふらん　降田　槇子
はるくるやがてかへる雁がね

春ふかく色よき野べをあとにして　馬島久仁子
いつれのかたに雁かへるらむ

咲初めしはなをみすてゝ空たかく　馬島　玉子
うしとやかへる春のかりがね

みる儘にとほさかり行く雁がねの
名殘こひしきはるのそらかな　青木 春子

春をうしとおもひ出てか雁がねは
はなのさかりに歸りゆくなり　香川千枝子

見るうちにかすみの奥に消え行ぬ
おぼろつき夜にかへる雁がね　香川 玉子

今はとてあきさし雁はかへるなり
かすみがくれに聲むかりして　香川 顯子

ほのぼのと霞める空のゆふまぐれ
ふるさとさしてかへる雁がね　木村 政子

身の業はまだ半ばにもならぬ間に
はやたちかへる雁のひとつら　海島 信子

おもひきや去年の初秋こしかりの
花をもよそにいまかへるとは　海島 定子

春がすみ棚びくそらにありわけの
つきをのこして雁かへるなり　田中 麟子

あり明の月もいまはのやまの端に
かへるさいそぐ雁のひとつら　井上 花子

雁がねはいづこを宿とさだめねど　横川 常子

歸へるとや言むあらずとや言む
花はわらひ蝶はまふなる春を置て　星 花子

世をあきの野に雁ぞ去ぬめる
都路のはなをむすてゝかへるかり　花山やす江

いかにふるすの戀しかるらん
春がすみたちこめたれむ影だにも　花山 操子

みえねむ聞こゆ雁がねのこゑ
いかなれむかへり行くらん雁金は　花山きのと

山路のゆきもまだきえぬまに
今はとてかへりもゆくか雁かねは　師岡千代子

みやこの空のあかねものから
みこし路はなほ雪ふかし花まちて　千賀 重子

かへれ雁がねことしむかりも
思ひあまりなきて行くらん雁金の　富士野安香

なみだにかすむ春のあけぼの
櫻むなさくをもまたでゆくかりは　南 淑子

いかに常世のたのしかるらむ
都をもあとに見すてゝゆくかりは　小原 紅子

おのが越路のはるやこひしき

久かたのあまつ雁がねこゑすなり　いまや越路にかへりゆくらん　久保田孝子

去年の秋なき來し雁がふるごろも　あらためぬとて巳が名をのる　久保田高子

さく花をともに見ばやと待つ空に　立ちかへりゆく雁もありけり　前野すゑ子

山の端に姿は消えておぼつかな　かすみにのこる雁のひとこゑ　東原とき子

笑む花もにほふかすみもある物を　こゝろつよくもかへる雁がね　高野辰子

漣波や志がのみづうみはるゞゝと　ひらのねこえて雁かへる見ゆ　木下雪江子

春ながらこゝろぼそきは雁がねの　わかれをつげる入あひのそら　柳滋子

さかりなる都のはなをよそにして　かへる雁がねこゝろ志られず　津田鞠子

薄ずみのよよもとかれぬ玉つさは　おぼろつき夜にかへる厂がね　上村たか子

閑かなるたびぢなるらん春たちて　かすめるそらをかへる厂がね　久保田りつ

別れてもまたこん秋はあるものを　なくゝゝかへる雁のひとむれ　柴ひな子

盛りなる春をすごさできませやと　こしぢのはゝにいひつてよ雁　柴そり子

香に匂ふはなはいく日もなき物を　見すてゝかへる厂がねのこゑ　村田喜代子

みやこ路の閑どけき空の淋しきは　雁がねかへるゆふべなりけり　村田美都留

かすみたつ方にと雁はかへるなり　越路のやまもはるとなりけむ　橋本丹江子

殘し來し雛にこゝろや引かるらん　はなを見すてゝかへる雁がね　松田靜枝子

いさましきますらたけをの音信を　つばさにかけてかへる雁がね　松田石子

さくら花やがて咲かんを雁がねは　などふる里へかへりゆくらん　鈴木秋子

春されど雪もまだらにあるものを　などかこし路にかへる雁がね　澤田春子

春がすみ立ちてへだてよ雁がねの
　こし路にかへる道もなきまで　德永萬壽子

春がすみ立をみすてゝかへりぬる
　雁はこしぢのはなやとふらん　德永　輝子

歸るとしおもへば惜しや雁がねの
　あきは來ぬべきかりの別れも　[illegible]井　重子

故鄕へきつゝ行くらむ天津かり
　みやこの春のはなのにしきを　三木　秀子

かへるさにまた來ん秋を忘るなと
　ちぎりやおかんあまつ雁がね　諸井　倉子

かすみ立つ春をみすてゝ雁がねの
　聲もほのかにかへるそらかな　池谷らん子

古里をわすれかねてやかくばかり
　はなのさかりにかへる雁がね　杉浦　糸子

春がすみ立ちおくれじと急ぎつゝ
　ともよびかはしかへる雁がね　吾妻知壽子

ふる里の春やいかにとみやこなる
　はなをみすてゝ雁かへるなり　館脇萬壽子

花のさゝみやこの春をあとに見て　大谷津琴子

　ゆきふるさとにかへる雁がね

夕がすみ匂へるかたを打ち見れば
　こゑもかすかにかへる雁がね　中島　房子

いつこにも宿らで雁の夜もすがら
　月にうかれてかへるこゑする　松原　常子

おもしろき花のみやこを後にして
　つばさならべて雁かへるなり　浦島　[illegible]子

山寺のいりあひつぐるかねのねに
　いそぎて雁もかへりゆくらん　水島[illegible]良子

花ちりて夕べさびしきかねのねに
　雁やいそぎてかへるなるらん　楠　精子

おもしろき花のみやこを後にして
　こし路をさしていそぐ雁がね　野田千代子

夕月のかげものすめるくも間より
　つばさつらねてかへる雁がね　島田　好子

春のよの朧ろにかすむくも間より
　つばさならべてかへる雁かな　溝口　佳子

あづさ弓はるの夕べはさびしきに
　かすみにきえてかへる雁がね　西村登羅子

わが里は昨來にけらしひさかたの
くもゐはるかにかへる雁がね　谷　つね子

久かたの空にてゑのみきこえつゝ
かすみへだてゝかへる雁がね　江馬　信子

契りおく秋のゆふべはわすれじと
つれてこし路にかへる雁がね　植木　鋼子

春されむかへる雁がねこし路なる
富山のそらはなきゝすぎてよ　大海原芳子

赤十字社に入社を勸むる文

天　東京芝區三田四國町　師岡千代子

先つ日はたえて久しき御對面のうれしさは春の日影の傾くをもわすられて今もなほ夢の心地し侍りさては其折いさゝか聞え上つる赤十字社へ御入社の御事よいかにかおぼしますらむかの赤十字社といふは去る明治の十年西南の亂の後佐野大給の君たちの博愛社といふものをたてゝ戰の場に病院を設け傷負ひしものは味方と敵とのけぢめなく助け療させられしを西の國々の赤十字社の主義全くこれに仝しければとてさる年より加盟せられて今はかしこくも　皇后宮の總裁し給ふものになんかの博愛衆に及ばしとのたまはせつるもかゝる事にや侍らむされむかしこきわたりを初め奉り心あらん君たちは進みてこの會に加はらせられ世のため國のため御心をつくし給ふとか承りぬまして此度の征淸の事起りていよゝそがいさをの著しき事いとよう知らせ給ふごとくにて侍りかねて世のため人のため御身をも惜しみ給はぬ御本性におはせむいかで〱とく此社に加はりたまひて　大御勅の御旨にもそひ總裁の宮の御いたつきをもうかゞはせ給へやなほ名譽、特別、正社員、贊助員などのけぢめあれど委しきは別紙社則をそへ侍れば御心のまに〱定めさせ給ひて御返事下させ給へ拙き筆のつきせぬくま〱はさる方に見し給へまづは此のことのみあなかしこ

地　大阪市北區相生町　梶井　久子

さねかへりたる此頃の寒さをいかにすぐしたまふらんこなたにはなほも火桶を友にてこもりがちに

のみ日を送れど御園生の梅のさかりはすぐさじと思ひつゝ心ならずも遠ざかりしに下風かをる御あたりにはかの雪のうち氷のうへの軍人たちをいたはりたまふにつけてあたゝかき脚半甲かけなどをものしたまふに御いとまなしとうけたまはりぬいともゝゝうれしき御心いれのほどになんされどゆかしき梅が香も一木たてるはなほ千本のかをりわびたるにまさらざるが如く何事もひとりなすわざはなほ多くの人の心をひとつにしてなす業にしかざるは今さら申すまでもなしこの赤十字社は世の人のあつき心ざしをもて成り彼我の別なく一視同仁をむねとしてあまねく世の不幸なるものをたすけんとするいともゝゝめでたきわざなれどかしこき御わたりよりもしむゝゝそをはげまさせたまひしなりこの社が今日　でのいさをは御もとにもとくよりしりたまひたらめどことに此度の御軍につきては此社のひたすら力を盡すべき折なればみな人いさみたちてなにくれといそしみたるいとうれしうなんこなたにもはじめは心づかでありしが去年或る友にいざなはれて加はりしに心なき身もいつしかそのかぐはしきならはしにそみていつくしみてふ事もかつゞゝさとり初めぬ眞の事につけて御情深き御わたりにはさしもやはとおぼしめしたまはんがその厚きひろき御惠の此社に加はりたまはんには此事業もいや進みに進み行き御心のかぐはしさもいよゝゝ四方にかをり滿ちてんと思はゆるまにゝゝ同社の雜誌二部に足らはぬ言の葉そへたてまつりていさゝか思ふふしをきこえあぐるになんもしひごろの御心もて共に此業を助け給はんと思召たゝせたまはゞ御入社の手續などはよろづこなたにて御取計らひまゐらすべけれど只々ゆかしき御かへりごとを鶯の初音はものかはと待ち奉るになんかしこ

人

出雲國飯石郡三刀屋村　奥原ふく子

この頃の寒さにつれて今朝は野も山も一つらに白妙の世の中とはなりはへりぬさるにつけてもいと忍ひかたきは遠征兵士の身のうへになむあはれ霜さゆる夜半雪ふれるあしたなど如何にすくすらむ

と思へはけに持てる筆のさきさへ凍る心地ぞすなるましてかゝる境にありて病におそはれし人々やいかならむ男子なりせばことりてわれもとおもへともをみなの身のはかなさたゝ〳〵うちなけくより外侍らすかし此ころ何某ぬしの許より赤十字社員募集の勸誘書をおこせたれは喜ひのあまり直ちに入社し且親しき友とちの人々にも及はん限りは勸誘すへき旨いひおくりはへりぬあはれ遠征兵士の苦辛をおもひやり妾か心のうちを察せられ奮ひて入社あらまほしうなむかしこ

佐々有麟子

去年の秋より玉くしげ三の韓山にたゝならぬ風のふきそめしより陸に海に萬軍千馬のこゑはさらなり鳴神なせる筒の音さかまく潮にひとしき時の聲をゆきては見聞かねどわが皇國の男女の耳をつらぬきて敵愾心をひきおこしたるぞうべなりけるそも〳〵赤十字社といへるは戰塲にたふれ且は手負たる御方の兵はことさら敵の將卒をも仁者の心を持て病をたすけ疵をすくふたよりにまうけぬる社といへれば貴賤上中垣のへだてなき婆心もて入社の事をいざはいざはとすゝめ申になんあなかしこ

太田　定子

きのふけふの軍の御有樣如何がきかせたまひつるや何かしの討死くれがしの手負ひなどきゝはべるまゝに身も心も立ち昇る心地のみせらるゝを御前のさかしき御心には如何に思ひ入り給ふらんかしされどまゝならぬ女の身の戈とりてみ軍に出でたらん事もならねばはやりみたるゝ心の緒を何れにかつなぎとめなましと畏くも　きさいの宮にはいたく御心を軍の上に用ゐさせ賜ひ早くも赤十字の盟に入らせられ御みづから其みすべに立たせ給ふとなんさるを下樣のものゝ如何でかは國の爲め心盡しの一はしをあらはしまつらざらん折りしも此何日と云ふには其か社にて入社員のつのりを行はせらるゝよしを承はり日頃よりのねがひも今日こそとうれしう侍るを御前には如何おばしたまふや同し御心にあらせたまはゝ此のよき折

りをバゆめ見すぐしたまはでとく入らせたまへかしこなかしこ

吉田　芳子

厚く結びかたく閉し丶渤海灣の水もいつしかとくち風にとけはて丶朝日の御旗の輝き渡れるぞいともいとも嬉しき事に思ひ侍りぬるさりながらこたびはしこのえみし共も其全力を盡ししと善良の武器を有せしとにより痛手負ひしみ國の武士もいと多きよし聞侍りぬ妾女の身にあれバ看護婦となり速に彼國に渡りみとりに繃帯に力の及バん限りは盡さまほしく思ひ侍れどはだしある身の如何はせんさるをこたび發行の女鑑にかゝる人こそ赤十字社に入りて國に報ずべきなれと掲けられぬうれしき事に思ひ侍るをもし御同志にまさむ妾方より御手續いたすべくなほ委しき事は別封女鑑にて知らせ給へかしとり急ぎ要事のみあなかしこ

降田　楓子

春風に野ざはの氷もとけそむる頃となり侍るをいよ丶平かにおはしますらんといと嬉しう思ひ侍りさてはこの暖かさにて皇御軍もいや深うきこのしこ卿生ひ繁るからのに分け入りて北京の城とかをうちやふるも近きにやと推しはかりぬそもこの御軍よりして世の人々御國を思ふ心厚くなさけ深くなりにしやう思はれ侍りぬおのれも赤十字社とて事あるをりには軍人の傷病などを治療し常には平人にも藥を施すたふときくはだてのありてかきこくも仁慈の御心に富ませ給ふ天皇皇后の宮にもいたくめでさせ給ひて厚き保護を下したまふとはかねてより聞きつるものからさすがに加はる心もなくて過ぐし侍りしに大御軍の起りて此社の働きの美はしき其事業のなさけ深きをきゝてげにかゝる時此社のなからましかばいたましきてきずをおひしものはいかゞなすらん武き武夫の心もたゆみやすらむ我軍の勝ちて勝つもまたこの社の力あづかりたらんとひたすら感じ侍り近ごろ社員に加はる人もあまたあるよし傳へきゝある人をたのみて入社の手續すまし侍りぬかねてめぐみの心厚き姉君にも同じ御志の侍らば此をりに入らせ給ひては如

何にや日頃中がきへだてぬ間柄とて無禮の罪もかへりみず赤心もですゝめまゐらするをゆるいたまひてよあなかしこや

木村　政子

凡そ人の死を聞き災に遇ふを見て忽ち哀憫の生ずるは人情の然らしむる所と存候況してや忠勇なる武夫の身は遠く故鄕を離れて踏みもならはぬ天涯萬里の地に至り二つとなき命を惜まず金を鑠ける夏の日にも涙も凍る冬の夜寒にも彈丸の雨霰と飛び來る中をも恐れず戈を枕に易ふるの時もしや不幸にして手傷を負ひあるは病に冒され親子兄弟の看護を受くるに由なく病の床に呻吟するを思へば誰しも腸を斷つの感あらんと存候其親子兄弟にかはり之れが看護をなすもの獨赤十字社あるのみそも我日本赤十字社は辱くも　皇帝皇后兩陛下の御保護の下に立ち愛國の人は奮うて加盟し今や實に盛大に至り申候彼の敵國互に相爭ふの戰場に於ても赤十字の旗章を一たび飜さば之に刃向ふものなく充分の手當を受るを得べければ其人　は赤十字を見る恰も故鄕の知己を見るが如くならんと存じ申候誠に如斯事業に贊助するは國民の義務なれば私も本月より入社の心得に御座候あなた樣にも御入社被成ては如何かぞんじまゐらせ候あなかしこ

田中　麟子

過しとしの比よりふらんすてふ國の夫人いくさの砌敵もみかたもきらひなく傷兵を救助して醫師の施療をなしいとあつう看護をほどこしたりけるを我日本にてもおなじおこなひにならさむがため赤十字社を立てかしこくも后宮陛下をはじめたてまつりやんごとなき御かたも自ら看護の道を開かせ給ひ心ある夫人達も社に入て看護のおこなひたしなみたまへるもいかでかふたならむこぞより日清のいくさ始まりかしこくも天皇陛下には御心やすからずおほしめされ廣嶋に御本營をうつせられ夜るぞなくひるぞなく心なやまされ陸海軍の將校兵士達も御國のために暑さ寒さのいとひなく難戰苦戰によねんなく命はかろく義は重くやまとをのこのたましひも今目のあたりにあらはれたりかゝる時

こそ赤十字社のいとかんえうとはなりぬれやまと夫人とてむなしく御いくさをよそに見はんへるべきか國のために萬分のひとつもつくしたけれど赤十字社に入て看護の道をならひ得たくこそ思ひをりぬれおなじ心の夫人かたもろともに社に入りたまはらんことをいのりはへるになん

柿本たづ子

世にあはれなることは多かれど雪霜ふかきとつ國のはてのえひすのことむけに傷つきなやめる益良夫の身こそいとあはれにもかなしかりけれされどいとかしこくも　大君をはじめ奉りきさいの宮にもいたく大御心にかけさせ給ひくさ／＼のものをさへ下し賜ひぬと承りぬるにいかでかよそでとは見流し侍らるべき御身も忘らせたまへるごとかの赤十字社といふはもはら愛をむねとしひろく戦人ともをあはれむとしきけばいさゝか御國につくすはしにもとこたび入社せんとおもひたち侍りひでろ御心おなじうせさせ給へばいかでもろともに入らせたまはずやとひたすらすゝめまつるになんあなかしこ

松田靜枝子

今度赤十字社は又いくそくの看護婦を戦地に送ると聞き侍りぬあはれ雪はふりしく満洲とやらの野に戈を枕に起き伏す武士がいさましき戦ひして受けし手創になやむ朝夕誰かそも慰め得る只一掬の清水一瓶の水薬も物柔かなる看護婦の手に持ち運ばるゝを見て病める兵士はいくばくの感謝といくそくの喜悦とを其の心に起すぞや世には慈善の事業多かりされどかゝる看護婦ばかりか醫師に薬品にあはれあらん限りは博愛の心を戦場に注く赤十字社の事業ほどうつくしきはあらじせめてはあるに甲斐なき身もこの社に入りかゝる大慈善の事業の幾分かを補ひまをさむやと思ひたち候かゝる事は申さずとも世に博愛の心厚き御身ゆめいなみ給はじと存じもろともに入社せばやと思ひ拙なき筆に心の程を申上候折ふし庭の紅梅一つ二つ風に綻び赤き心を示し顔なるもいとをかしく存し候あはれうるはしき御返事まちたてまつるかしこ

植木　鋼子

去年の夏大御國と清國との事起りてより遠征の途に上れるあまたのいくさびとの為御國にのこれる人々或は物品に金員に恤兵部へ獻納し或は壯健に年若きは人夫となり女も志有は家事を父母に任せ看護婦とならん事を願ひ出る杯おのがさゝ心の限り盡さぬはなく殊にうらやみのぞましきは赤十字社々員のはまれにて此社は西洋各國同盟の約束として戰時たりとも彼我の別なく負傷疾病の論なくいとねもころに治療看護至らざるなく其慈愛の廣大なる又他に類ひ有べくもあらずされど此社員の一人とも成なばおのづからなる方便にていくばくの患者を救ひ得らるゝ事も有んかとこたびにはか心づに待り同し御心におはしまさはとく諸共にたづさへて入社せまほしくひたぶるに勸め參らするになむかしこ

三月衆題

- 五日
  - 歌……………春　海邊
  - 文……………入學を祝ふ辭
- 廿日
  - 歌……………早蕨
  - 文……………うれしきもの

學園

なり、前にも、既に云へる如く、今日、四千萬人の臣民は、皆、天神地祇の子孫にて、天神地祇は、皆、諾冊二神より出で、而して、其の正統を傳へ給へるは、天皇なり。之を人に譬ふれど、天皇は、頭にましまして、臣民は手足なり。手足は、頭の爲にあるものにして、手足の爲に、頭あるにあらず。されど、手足の頭に仕ふるは、當然の事にして決して、怪むに足らざるなり。且、天皇は、宗家にましまして、父母の如く、臣民は、支家にして、子孫の如くなれど、其の臣民を愛撫し給ふことも、大方ならず。彼の外國の君主などの如く、陽に、仁惠を衒ひ、陰に、私慾を恣にするが如き比ゐあらず。仁徳天皇は、炊煙の多少を見て、臣民の艱苦を察し給ひ、一條天皇は、寒夜御衣を脫して、貧民の上を思ひやり給へるが如きは、海外諸國に、絶ゑてあるべき所にあらず。代々の天皇の、臣民を愛撫し給へること、實に、此の如し。此の高大なる御恩德、いかでか、報い奉り得べき。なれども、臣民たるものは、此の萬分の一だに、報い奉らんことを期せざるべからず。

後醍醐天皇

世をさまりたみやすかれといのることそ我が身につきぬ思なりけれ

一首の意は、世の中の亂るゝこともなく、目に干戈を見ず。耳に金皷の響を聞かず。四海波靜にして、草木も枝を鳴らさず、臣民は、壤を擊ちて太平を歌ひ、腹を皷ちて安樂を歡び、少しも、憂ひ苦むことのなからむ樣にと、神に祈るのみが、臣民を統御する我が身にとりて、朝夕絕ゆることなき思なりと宣へるなり。

天皇陛下は、臣民を子の如く思し召して、父母の愛子を思ふが如く、朝夕忘れ給ふことなく、世の中、よく治まりて、臣民、おしなべて、安樂に生活する樣にとのみ、願ひ祈り給へり。まして、此の歌を詠み給ひし後醍醐天皇の如きは、賊を滅ぼし給はむとして、備に、艱難辛苦を甞め給ひ、賊に攻られて、笠置山を、藤原藤房卿と、唯、二人して、夜中に陷ちさせ給ひし時などは、

さして行く笠置の山を出しより天が下にはかくれがもなし、とまで詠じ給ひ、

遂に隱岐の嶋にさへ、遷されおはしましぬ。其の後、賊滅びて、天下、再、天皇の御代になりしかども、足利尊氏と云ふ逆臣背き奉りて、又、吉野山に行幸し給ひ、遂に、其の山中にて、崩御ましましゝかど、臣民の上、世の事を思し召も

給ひしこと、此の御歌の意の如し。實に、畏きことならずや。此の如く、臣民の上を思し召し給ふは、獨、此の天皇のみにあらず、代々、皆然らざるはましまさず。臣民たるもの、此の大御心を心として、父子相親み、夫婦相和し、兄弟相睦ひ、朋友相信し、互に欺罔詐僞することなく、相扶け相計りて、一家を安穩にし、一國を太平ならしめ、　天皇の大御心を安んじ奉る樣にせざるべからず。是忠孝の大切なる所なり。

後鳥羽天皇

夜をさむみねやのふすまのさゆるにもわらやの風をおもひこそやれ

夜をさむみとは、夜の寒さにと云ふ意なり。○ねやのふすまとは、夜寢る部屋の布團と云ふことなり。○さゆるとは、寒きことなり。○わらやとは、藁にて葺きたる家にて、極めて、下等人民の住みて居る處なり。○一首の意は、夜か寒くして、閨の中に着てねて居る夜具の冷く寒きにつけても、貧しき臣民が、藁屋の中に、薄き布團を着て、寢て居る上に、吹く所の風は、如何ばかり寒き事ならむ。嘸かし、堪へられぬ事なるべし。實に、不便の至なりとの、御歌なり。

天皇陛下は、深く、九重の中に御坐しまして、金殿玉樓に住み給へれど、臣民の身の上の事などは、少しも、思ひよらせ給ふことはあるまじなど思へるは、甚も、畏きことぞかし。寝ても起きても、臣民の上を、暫時も忘れ給はざることは、以上の御製によりて、明かなるべし。まして、此の御製に至りては、恐多くも、臣民の身の上の事を、玉體に引き比べて、思ひやらせ給へること、畏しとも、辱しとも、申し上げ奉るべき詞もなし。唯、感涙に咽ぶより外はなきなり。然るに親の心、子知らずと、世の諺にも云へる如く、天皇の大御心を心とせず、皇恩のあり難きことを、朝夕思ひ出で奉らぬもの、世におほきが如し。此の如きは、實に、不忠不孝と云ふべきなり。高山正之と云ひし人は、京師に至る毎に、三條橋上に跪き、臣高山正之と云ひて、涙を流して、遥に、皇城を拜し奉りきとぞ。臣民たるものは、正に、此くぞあるべき。口に、忠孝を説くといへども、之を、身に行はずば、何の益かあらむ。故に、天皇の、夜の風にも、臣民を思ひやらせ給へるが如く、臣民も、亦、暫時も、天皇の御恩を忘るゝことなく、常に、陛下の萬歳を祈り奉り、朝夕の立居振舞につけても、皆、天皇の御爲と云ふこ

とを心に取り持ちて、勤め行ふべきなり。然る時は、皇恩の万一にも、報い奉ることに近かるべし。

津守國夏

怠たらずいのるも御代のためなればきみと神とに身はつかへつゝ

一首の意は、朝夕少しの間も怠ることなく、國豊に民安かれとのみ祈りて、我が一身上のことは、聊も顧みず。是も御代の爲に心を盡くし力を盡くすことなれば、臣民たるものゝ正に務むべき道なり。されど、朝廷に出でゝ直接に仕へずとも、我が身は、常に君と神とに仕へつゝあるものなりとなり。

神は我が國を造り給ひ、臣民の祖先なれど、朝夕仕へ奉るは、當然の道なり。君は臣民を統御して、安樂に生活することを得る樣に治め給ふことなれば、之に仕へ奉るも亦當然の道なり。然れども、神は何處に祭りても仕へ奉ることを得れども、君は一人にて、宮中にましませど、朝廷にある百官ならでは、直接には仕へ奉りがたし。されど朝廷以外の人は、君に仕へ奉ることを得ざるが如しと雖も、決して左にあらず。神に仕へて君の萬歳を祈り、國土安穏を願ひ、或は業を勉め職

を勵み、一擧手一投足も、皆君の爲と思ひて、各其の心力を盡すは、即君に仕ふる所以なり。我が國の臣民たるものは、如何なる人にても、神と君とに仕ふることを、一日も忘るまじきなり。若此の心を忘れたらんには、實に不忠不孝の人といふべし。

大江宗秀

天の下誰かはもれむ日のごとくやぶしもわかぬ君がめぐみは

誰かはもれんとは、誰にても漏るゝものはなしとなり。○やぶしもわかぬとは、藪も別がぬにて、如何に繁りたる藪の中にても、別け隔てなくと云ふ意なり。しは助辭。○一首の意は、恰も天日の照らさぬ處なきが如く、如何にかう〳〵しく生ひ繁りたる藪の中にても、別け隔てなく行きわたれる君の恵には、普天の下率土の濱、如何なる處に住む人にても、一人でも漏るゝものなく、皆君の恵を蒙らぬはなしとなり。

四千万の臣民が、此の國内に生活して、豐に食し温に衣て、何事もなく樂しく今日を暮すは、果して誰の恩惠なるか、皆天皇の御恵にあらざるはなし。前にも

委しく云へる如く、我が國は、天神の造り給ひて、其の神の嫡流にまします、正統の御方か、代々受け繼ぎ給ひ、 天皇の位にまし〱て、之を治め給ふことなれど、我が大日本國は、即 天皇の御國なり。山川草木禽獸虫魚に至るまで、皆 天皇の御物にあらざるはなし。然るを臣民の繁殖するに従ひて、之に別ち與へ、各其の力によりて、生活の道を得しめ給ふは、猶父の子に財産を分與するに異ならず。故に此の土地に住み、此の五穀を食して、安樂に生活するさへ無上の鴻恩なるに、 天皇は、風雨寒暑につけても、晝夜臣民の身の上を忘れ給ふことなく、世の中治まりて、臣民の安からんことをのみ祈り給へり。然るに世には、猶之を不足に思ひて、上を恨み世を嘲つものあり。かゝる人は、其の足る事を知らずして、身に不相應なる富貴を希ふものなり。然らざれど、常に勉め働かずして、怠惰に流れ酒色に耽りて、自貧苦を招きしものなり。而して之を以て、自我が身を責すして、罪を君に歸するは、猶父より財産を分與せられし子の、放蕩無頼にして貧困に陷りし後、父を恨むが如し。其の正道に非ること明なり。君恩は天日の如く、雨露の如し。如何なる處にても、照さゞることなく、施さゞる處なし。人富貴を

求めむぞならバ、宜しく自勉め勵むべし。勉め勵む時は、如何なる富貴も得がたきにあらず。然る時は、啻に一身の幸福なるのみならず。實に　皇恩を空しくせざるものなり。放蕩無頼遊惰驕恣にして、上を恨み世を嘲つものは、實に　皇恩に背くものと云ふべし。

讀人知らず

もの丶ふのおみのをとこは大きみのまけのまに〳〵きくとふものぞ

もの丶ふとは、弓矢を取りて君に仕ふるものなり。○臣のをとことは、臣の男なり。○まけのまに〳〵とは、　天皇の御命令のまゝになり。○聞くとふ物ぞとは、聞くと云ふ物ぞにて、　天皇の御勅命のまゝに、如何なる事にても、服從し奉るべきものぞとなり。○一首の意は、弓矢を取りて朝廷に仕へ奉る臣民は、譬戰場にもあれ、水火の中にもあれ、家を捨て身を顧みず、　天皇の御命令の通りに服從し奉りて、奮發勇進し、其の功を奏して以て、忠節を勵むべきものぞとなり。我が國は、　天皇ましまして臣民あり。臣民ありて　天皇ましますに非ず。故に天下は、　天皇の天下にして、天下の天下には非ざるなり。世には、　天皇は人民

征淸軍紀念碑設立廣告

今回大阪府下河内國讃良郡飯盛山下四條畷別格官幣社贈從三位小楠公社地内へ征淸軍紀念碑ヲ設立ス有志ノ諸君ハ陸續御寄付アランコトヲ

一銃劍ヲ模シ高サ五丈トシ中空ノ鑄造ニシテ全部ヲ金箔塗リトナシ表面ニハ征淸軍殉公之紀念ノ八字ヲ鐫刻シ礎臺ハ花崗石ヲ以テ組立ナンース此ノ經費建築概算ハ一萬四千圓

一成功期限ハ本建築ノ難易如何ニヨリ長短ノ別アレトモ二月ヨリ起工シ五月三日小楠公五百五十年祭迄ニ竣成セントス

一賛成金ハ可相成本月中ニ御寄贈有之度事

明治廿八年二月

發起人 西村捨三

賛成人 辻新次 西澤之助

事務取扱 森敬一郎

本事務ハ東京々橋區築地二丁目廿一番地國光社森敬一郎取扱候間御書通ハ同人へ宛御差出被下度候

女鑑第八十號目次

（明治二十四年八月八日内務省許可）
（明治廿五年三月十二日遞信省認可）

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京**新富町**郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證出さず金員領收の上は直ちに女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿八年二月二十七日印刷
同　年同月二十八日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）